

福井県埋蔵文化財調査報告 第113集

木崎山城跡・木崎遺跡

— 舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査 —

2 0 1 0

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



(1)木崎山城跡 経塚2 検出状況(東より)



(2)木崎山城跡 経塚2 出土紙片



(3)木崎山城跡 経塚2 出土経筒



(4)木崎遺跡 2区SE01遺物出土状況(東方より)

序 文

本書は、舞鶴若狭自動車道建設に伴い、小浜市木崎・和久里において平成18年度から19年度にかけて発掘調査を実施した木崎山城跡と木崎遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

木崎山城跡は南川右岸の丘陵上に所在する戦国期の山城で、今回の調査では尾根先端部を中心に調査し、曲輪や堀切を検出しました。また、弥生時代後期後半を中心とする台状墓2基、平安時代と鎌倉時代の経塚各1基も確認し、この丘陵が断続的に利用されてきたことがわかりました。鎌倉時代の経塚からは、非常に保存状態の良い青銅製の経筒が見つかり、なかに残っていた紙片には朱で書かれた文字が見て取れるものもありました。

木崎遺跡は木崎山城跡の前面に広がる沖積平野に位置する集落遺跡で、その中心となる時期は弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の3時期です。特に注意される遺構は、古墳時代後期の大規模な掘立柱建物です。四面庇付建物と推測されるもので、県下で検出された古墳時代の建物としては最大のもので、また、遺物では、木簡や墨書土器など10世紀前半を中心とする文字資料を得られたことが大きな成果です。特に「乃井村」と判読できる墨書は、「乃井」が若狭国に置かれた「濃飯駅家」の「濃飯」と同音である点から注目を集め、濃飯駅家の所在地論争に一石を投じるものとなりました。

本書が今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方がたに活用される一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様がたから多大なご支援とご協力を賜りましたことに、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 吉 岡 泰 英

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが舞鶴若狭自動車道建設事業に伴い、平成17年度から18年度にかけて実施した木崎山城跡(福井県小浜市木崎所在)と木崎遺跡(小浜市和久里所在)の発掘調査報告書である。
- 2 木崎山城跡・木崎遺跡の調査は、西日本高速道路株式会社関西支社福知山管理事務所(現福知山高速道路事務所)の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 木崎山城跡の発掘調査は、平成17年(2005)9月12日から平成18年(2006)5月31日まで実施し、木崎遺跡の発掘調査は平成18年(2006)6月14日から9月22日まで実施した。両遺跡の調査担当者は以下のとおりである。なお、担当者の役職は調査当時のものである。
木崎山城跡 平成17年度：文化財調査員田中祐二・坪田聡子、嘱託職員二村陽子・中野靖之
平成18年度：文化財調査員坪田聡子、嘱託職員中野靖之・森下智恵
木崎遺跡 平成18年度：文化財調査員坪田聡子、嘱託職員中野靖之・森下智恵
- 4 木崎山城跡の出土遺物の整理作業は平成19年(2007)4月2日から平成21年(2009)3月31日まで、木崎遺跡の出土遺物の整理作業は平成19年(2007)4月2日から平成21年(2009)3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 5 本書の編集は坪田があたり、田中、主任富山正明、同本多達哉、文化財調査員木村孝一郎、嘱託職員杉山大晋が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。
田中祐二 第1章第1節、第2章 坪田聡子 第1章第2節、第3章、第4章
富山正明 第4章 石器・石製品 本多達哉 第4章 木製品
木村孝一郎 第3章・第4章 輸入磁器・中世陶器 杉山大晋 第3章 金属製品
- 6 木崎山城跡・木崎遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 遺構の図版作成は、嘱託職員木村茉莉・井之口茂と坪田が行った。出土遺物の図化・図版作成は、富山、坪田、田中、木村(孝)、木村(茉)、井之口、杉山ならびに、嘱託職員早瀬亮介・池原悠貴・土谷崇夫・西真里子・齋藤寛子が行い、同写真撮影は木村(茉)・西の協力を得て、嘱託職員山口充が行った。また、年輪年代鑑定を実施した木製品4点については、独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所(現独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所)で撮影した写真を使用した。
- 8 本書に掲載した地形図および遺構図は、木崎山城跡については株式会社かんこうに、木崎遺跡については株式会社イビソクに委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に前記の委託業者がそれぞれ撮影したものである。
- 9 木崎山城跡出土の鉄製品と青銅製品の保存処理および紙片の分析については、山梨文化財研究所に委託した。木崎遺跡出土の木製品については、保存処理と樹種鑑定を株式会社吉田生物研究所に委託し、年輪年代鑑定を独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所(現独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所)の光谷拓実氏に委託した。
- 10 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符号する。写真の縮尺は不同である。
- 11 本書における水平レベルの表示は、海拔高(m)を示し、方位はすべて座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。
- 12 色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を基準とする。
- 13 遺物実測図は、断面黒塗りが須恵器を指し、細かい斜線のトーンは石の断面を、粗い斜線のトーンは金属製品の断面を表す。また、木製品の薄いトーンは焦がしの範囲を示す。そのほかのトーンについては挿図中に凡例を示した。
- 14 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 15 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々および機関のご協力・ご教示を得た(敬称略)。
有馬香織、和泉哲夫、大森睦子、株式会社岡墨光堂、川越光洋、久保智康、高妻洋成、肥塚隆保、(財)若狭湾エネルギー研究センター、芝田寿朗、清水梨代、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所、中井均、馬場基、林大智、樋上昇、久田正弘、福田茂一、穂積裕昌、松村知也、水野和雄、水村伸行、光谷拓実、村木二郎、村上雅紀、木簡学会、横濱則也、山口龍史、若狭健康福祉センター
- 16 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

	頁
第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 木崎山城跡の調査	7
第1節 遺構と遺物	7
第2節 まとめ	28
第4章 木崎遺跡の調査	29
第1節 1区	29
第2節 2区	31
第3節 3区	35
第4節 4区(第1面)	42
第5節 4区(第2面)	48
第6節 5区	52
第7節 6区	63
第8節 まとめ	75

写真図版目次

卷首図版	(1)木崎山城跡 経塚2 検出状況	(2)木崎山城跡 経塚2 出土紙片
	(3)木崎山城跡 経塚2 出土経筒	(4)木崎遺跡 2区SE01遺物出土状況
図版第1	木崎山城跡 (1)調査区遠景	(2)調査区全景
図版第2	木崎山城跡 台状墓1 (1)台状墓1・曲輪2	(2)台状墓1 埋葬施設1・2
図版第3	木崎山城跡 台状墓2 (1)台状墓2	(2)台状墓2
図版第4	木崎山城跡 経塚1 (1)経塚1 集石	(2)経塚1 石組
図版第5	木崎山城跡 経塚2 (1)経塚2	(2)経塚2
図版第6	木崎山城跡 曲輪・堀切 (1)堀切1・曲輪2	(2)堀切2
図版第7	木崎山城跡 曲輪 (1)堀切4・切岸	(2)曲輪5
図版第8	木崎山城跡 遺物 台状墓1・2 出土土器	
図版第9	木崎山城跡 遺物 経塚1・2、堀切1、遺構外出土土器・陶磁器	
図版第10	木崎山城跡 遺物 台状墓1・2、経塚2 出土金属製品	
図版第11	木崎遺跡 (1)調査区全景・木崎山城跡遠景	(2)1区全景
図版第12	木崎遺跡 2区 (1)2区全景	(2)2区SE01半截状況
図版第13	木崎遺跡 3・4区 (1)3区全景	(2)4区第1面全景
図版第14	木崎遺跡 4区 (1)4区第2面全景	(2)4区第2面立会調査地点全景
	(3)4区SE03井戸枠内完掘状況	(4)4区SE03半截状況
図版第15	木崎遺跡 5区 (1)5区全景	(2)5区SE02
図版第16	木崎遺跡 遺物 (1)1区出土土器	(2)2区出土土器
図版第17	木崎遺跡 遺物 (1)2区出土土器	(2)3区出土土器・陶器・土製品
図版第18	木崎遺跡 遺物 3区出土土器・陶器・土製品	
図版第19	木崎遺跡 遺物 4区第1面出土土器・陶器・土製品	
図版第20	木崎遺跡 遺物 4区第1面出土土器・陶器・土製品	
図版第21	木崎遺跡 遺物 (1)4区第2面出土土器・土製品	(2)5区出土土器・土製品
図版第22	木崎遺跡 遺物 5区出土土器・土製品	
図版第23	木崎遺跡 遺物 (1)5区出土土器・陶磁器	(2)6区出土土器・土製品
図版第24	木崎遺跡 遺物 木製品1	
図版第25	木崎遺跡 遺物 木製品2	
図版第26	木崎遺跡 遺物 木製品3、石器・石製品	

挿 図 目 次

	頁		頁
第1図	木崎山城跡・木崎遺跡位置図	第37図	3区遺構配置図
第2図	若狭湾沿岸の地形区分図	第38図	3区柱穴列1実測図
第3図	周辺の遺跡分布図	第39図	3区柱穴実測図
第4図	現況測量図	第40図	3区土坑・柱穴出土遺物実測図
第5図	全体図	第41図	3区SR01土層図
第6図	台状墓1・曲輪2実測図	第42図	3区溝・自然流路出土遺物実測図
第7図	台状墓1・埋葬施設1・2実測図	第43図	3区SR01・SD13出土遺物実測図
第8図	台状墓1出土遺物実測図	第44図	3区遺構外出土遺物実測図
第9図	台状墓2実測図	第45図	4区第1面遺構配置図
第10図	台状墓2・埋葬施設1実測図	第46図	4区第1面遺構出土遺物実測図
第11図	台状墓2・埋葬施設2実測図	第47図	4区第1面遺構外出土遺物実測図1
第12図	台状墓2・埋葬施設3実測図	第48図	4区第1面遺構外出土遺物実測図2
第13図	台状墓2出土遺物実測図	第49図	4区第1面遺構外出土遺物実測図3
第14図	台状墓2・埋葬施設3出土遺物実測図	第50図	4区第1面遺構外出土遺物実測図4・拓影
第15図	経塚1実測図	第51図	4区第2面遺構配置図
第16図	経塚1石組実測図	第52図	4区第2面SE03実測図
第17図	経塚1出土遺物実測図1	第53図	4区第2面SE03出土遺物実測図1
第18図	経塚1出土遺物実測図2	第54図	4区第2面SE03出土遺物実測図2
第19図	経塚2実測図	第55図	4区第2面柱穴実測図
第20図	経塚2出土遺物実測図・拓影	第56図	4区第2面遺構出土遺物実測図
第21図	堀切1出土遺物実測図	第57図	4区第2面遺構外出土遺物実測図
第22図	土層図1	第58図	5区遺構配置図
第23図	土層図2	第59図	5区SB01柱穴出土遺物実測図
第24図	遺構外出土遺物実測図	第60図	5区SB01実測図
第25図	木崎山城要図	第61図	5区SE02実測図
第26図	土層概略図	第62図	5区SE02出土遺物実測図
第27図	全体図	第63図	5区柱穴実測図
第28図	1区遺構配置図	第64図	5区土坑・柱穴出土遺物実測図
第29図	1区遺構出土遺物実測図	第65図	5区SD18土層図
第30図	1区遺構外出土遺物実測図・拓影	第66図	5区SD18・SD20出土遺物実測図
第31図	2区遺構配置図	第67図	5区遺構外出土遺物実測図1
第32図	2区SE01実測図	第68図	5区遺構外出土遺物実測図2
第33図	2区SE01出土遺物実測図1	第69図	5区遺構外出土遺物実測図3・拓影
第34図	2区SE01出土遺物実測図2	第70図	6区遺構配置図
第35図	2区遺構出土遺物実測図	第71図	6区遺構出土遺物実測図
第36図	2区遺構外出土遺物実測図	第72図	6区遺構外出土遺物実測図

表 目 次

	頁
第1表 遺跡名一覧表	5
第2表 土器・陶磁器観察表	26
第3表 台状墓1・2出土鉄製品観察表	27
第4表 経塚1出土青銅製品観察表	27
第5表 経塚1出土鉄鏃観察表	27
第6表 経塚1ほか出土鉄製品観察表	27
第7表 経塚1出土火打金観察表	27
第8表 経塚2出土青銅製品観察表	27
第9表 経塚2出土銭貨観察表	27
第10表 1区主要遺構一覧表	30
第11表 2区主要遺構一覧表	32
第12表 3区主要遺構一覧表	36
第13表 4区第1面主要遺構一覧表	42
第14表 4区第2面主要遺構一覧表	48
第15表 5区主要遺構一覧表	53
第16表 6区主要遺構一覧表	63
第17表 土器・陶磁器等観察表	66
第18表 土製品観察表	73
第19表 瓦観察表	73
第20表 石器・石製品観察表	74
第21表 木製品観察表	74
第22表 銭貨観察表	74

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

舞鶴若狭自動車道¹⁾は、舞鶴東インターチェンジから北陸自動車道敦賀インターチェンジまでを結ぶ自動車専用道路として平成元年(1989)に基本計画が決定された。これに伴う埋蔵文化財の発掘調査を平成9年(1997)から福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施している。周知の遺跡である木崎山城跡ならびに木崎遺跡も事業予定地にかかることから、その範囲確認と内容の把握が必要となった(第1図)。

木崎山城跡の試掘調査は平成16年(2004)5月11日～14日に実施した。試掘調査以前の踏査によって、事業対象地内に山城に伴う堀切や曲輪が確認されており、試掘の結果、遺物も少量ながら出土した。さらに、尾根の先端部に設定したトレンチからまとまった量の弥生土器が出土し、弥生時代の墳墓が存在する可能性が考えられた。以上の状況から、尾根上の1,630㎡について本格調査が必要と判断された。

木崎遺跡の試掘調査は、平成16年(2004)11月19日・22日に実施した。現況が水田であったことから、事業予定地内におおよそ20m間隔で試掘坑を設定し、重機による掘り下げを行った。その結果、遺構は確認されなかったものの、弥生・古墳・平安時代の土器を出土する良好な遺物包含層を検出した。また、事業予定地の東側に砂層をベースとする微高地が存在することが明らかとなり、その範囲が遺跡の主体となることが推測された。以上により、良好な遺物包含層が遺存する4,500㎡の範囲について本格調査が必要と判断され、このうち橋脚部分798㎡について本格調査を行うこととなった。

第2節 調査の経過

木崎山城跡・木崎遺跡の調査期間・調査面積・航空測量日は以下のとおりである。

木崎山城跡

調査面積 1,630㎡ 調査期間 平成17年(2005)9月12日～平成18年(2006)5月31日

現況測量日 平成17年(2005)10月6日 航空測量日 平成18年(2006)5月30日

木崎遺跡

1区 調査面積 139㎡ 調査期間 平成18年(2006)6月14日～平成18年(2006)8月1日

2区 調査面積 144㎡ 調査期間 平成18年(2006)6月14日～平成18年(2006)8月3日

3区 調査面積 175㎡ 調査期間 平成18年(2006)6月14日～平成18年(2006)8月1日

4区 調査面積 147㎡ 調査期間 平成18年(2006)8月1日～平成18年(2006)9月4日

5区 調査面積 193㎡ 調査期間 平成18年(2006)8月7日～平成18年(2006)9月6日

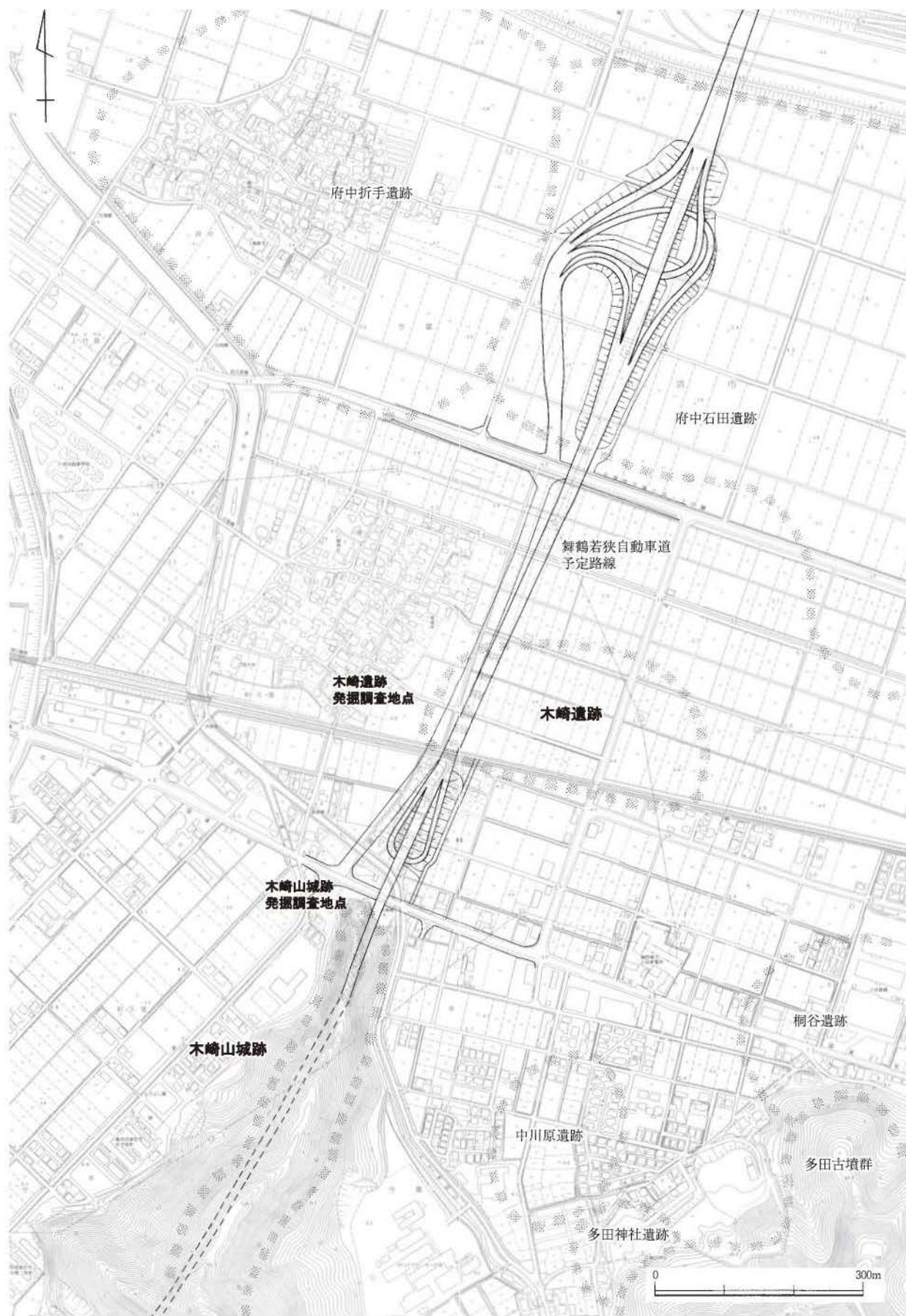
航空測量日 1・2・3区 平成18年(2006)7月29日 4・5区 平成18年(2006)8月31日

4区北側水路部分(工事立会) 立会調査面積 40㎡ 立会調査期間 平成18年(2006)9月14日～平成18年(2006)9月22日 測量(電子平板)日 平成18年(2006)9月21日

6区(工事立会) 立会調査面積 161㎡ 立会調査期間 平成21年(2009)3月31日・4月2日・4月3日

註

1 舞鶴若狭自動車道については、当初「近畿自動車道敦賀線」と呼称していたが、平成15年(2003)3月9日に福井県内で一部開通した際、兵庫県の吉川ジャンクションから福井県の敦賀ジャンクションまでの道路名称が「舞鶴若狭自動車道」に改称された。



第1図 木崎山城跡・木崎遺跡位置図(縮尺1/8,000)

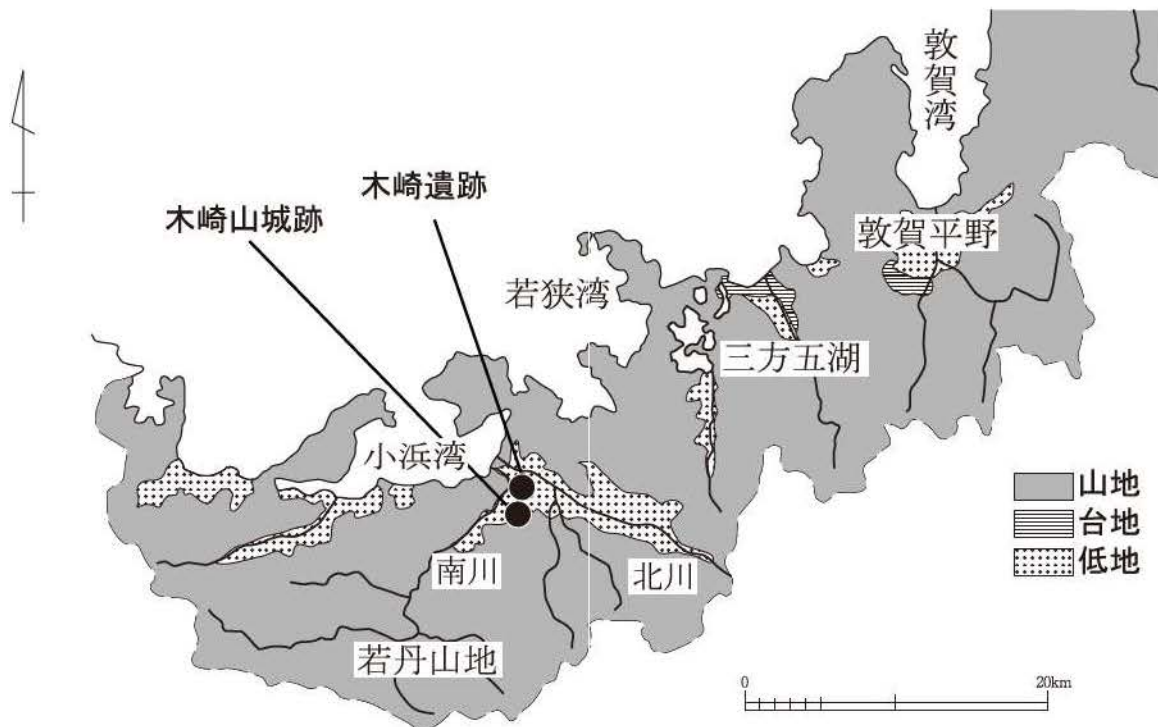
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

福井県は本州中央付近の日本海に面した凹部に位置し、東西約130km、南北約100km、面積約4,189km²をはかる。敦賀市東部に位置する木ノ芽山嶺を南北の境として嶺北、嶺南に区分される。

福井県南西部の嶺南地方は若狭湾に面した狭小な地域であり、旧国若狭の範囲に、越前の一部であった敦賀市を加えたものとはほぼ一致する(第2図)。背後は丹波高原北縁にあたる若丹山地の山稜を境に京都府および滋賀県と接している。若狭湾一帯は著しく沈降した地形で、山地は海岸部に迫り、沿岸部は典型的なりアス式海岸をなす。したがって、大小の半島が突出し、天然の良港に富む一方、山地は急峻で谷も短く、平地に乏しい。

小浜市は嶺南地方の西寄りに位置し、内外海半島と大島半島に抱えられた小浜湾に面している。市域は東で三方上中郡若狭町と、西から南西にかけて大飯郡おおい町と接し、南東は若丹山地を挟んで滋賀県高島市と接する。市域には北川、南川という二大河川が流れており、北川流域には若狭地方最大の沖積平野である小浜平野が形成されている。平野の西端では、北東流してきた南川が流路を北西へと転換し、北川と並んで小浜湾に注ぐ。さらに、両河川の間を北川の支流である多田川が貫流している。この多田川が流れる谷の出口に位置するのが木崎遺跡であり、谷の西側を画する尾根に立地するのが木崎山城跡である。両遺跡間の距離は約500mを測る。



第2図 若狭湾沿岸の地形区分図(縮尺1/500,000)

第2節 歴史的環境

小浜市域では約200箇所の遺跡・遺物散布地が確認されている。なかでも小浜平野とその周辺山麓部に分布が集中しており、木崎山城跡・木崎遺跡が所在する平野西部域にも多数の遺跡が認められる(第3図・第1表)。ここでは、両遺跡が形成された弥生時代～中世について、発掘調査などにより内容が一定程度把握できる遺跡を中心に概説してみたい。

弥生時代

平野に沿った山際縁辺において多くの遺跡が確認されており、近年、高塚遺跡(42)、中辻堂遺跡(19)、下松塚遺跡(36)、平野遺跡(68)、加茂遺跡などが相次いで調査された。中辻堂遺跡が中期後半にかかる以外は後期に属する。高塚遺跡と加茂遺跡では平地式住居が検出されている。これらの遺跡は平野に面する谷の出口に形成された扇状地上に立地しており、該期における集落立地の傾向と考えられている。

一方、小浜平野の中央部は自然堤防があまり発達せず、居住には適さないとの認識が一般的であった。しかし今回報告する木崎遺跡(2)および、舞鶴若狭自動車道建設に伴い発掘調査を実施した府中石田遺跡(13)の成果によって、小浜平野中央部が居住域や墓域として開発されていたことが明らかとなった。

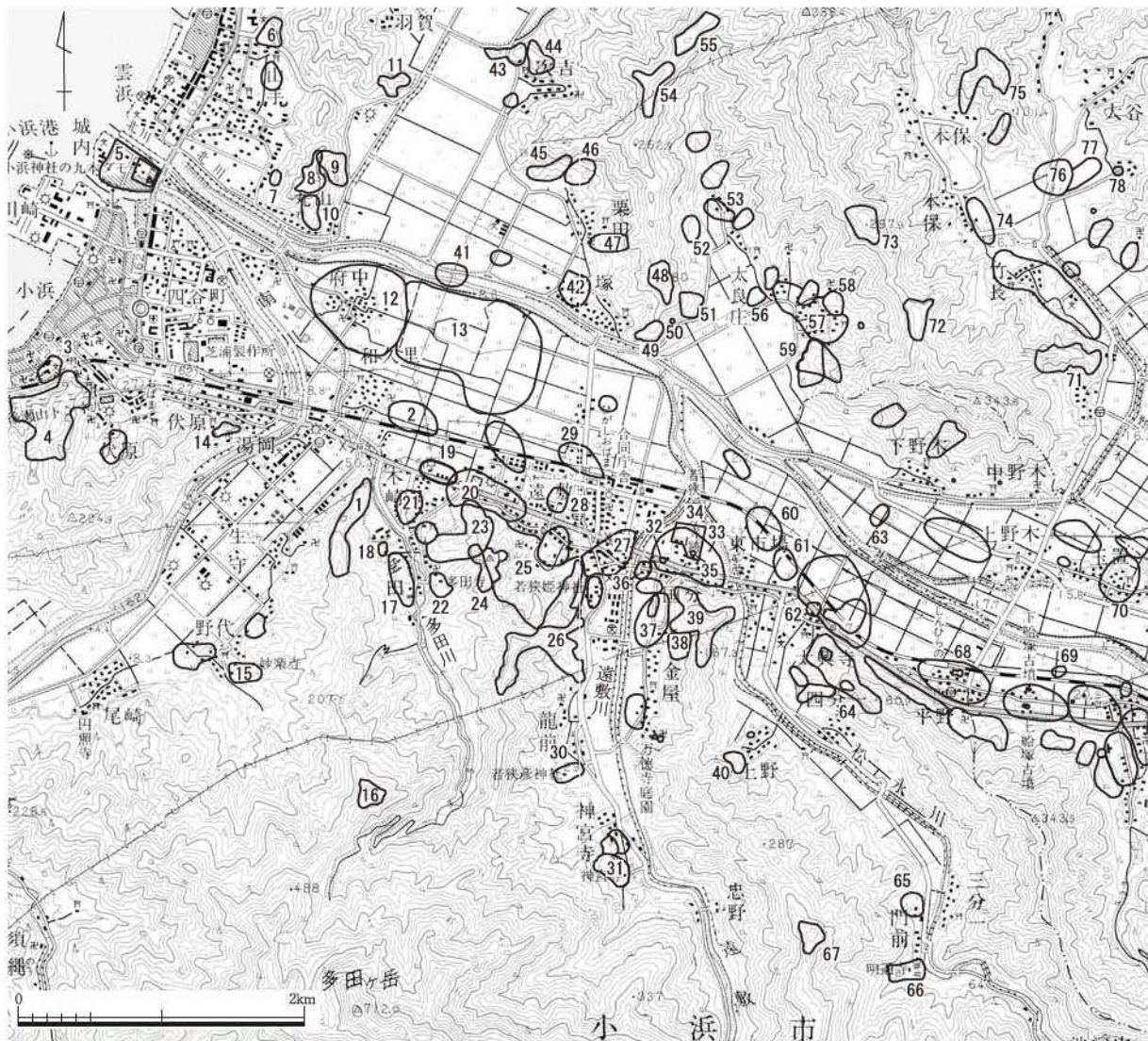
府中石田遺跡では、敦賀市吉河遺跡に次いで嶺南地方で2例目となる方形周溝墓群が発見された。時期は中期後半から後期にかけてのもので、総検出数は約60基におよぶ。埋葬施設には組合式木棺が遺存した例も複数ある。さらに方形周溝墓群とは区域を違えて住居や掘立柱建物が検出されたほか、分銅形土製品や巴形銅器など貴重な資料の出土もあり、若狭湾岸の弥生集落・墓制を考える上で画期的な調査となりうる。また、府中石田遺跡では、前期の遠賀川式土器が遺構に伴って出土しており、すぐ北側に所在する丸山河床遺跡(41)との関連が注目される。丸山河床遺跡は、斧柄や高杯などの木製品とともに遠賀川式土器がまとまって出土しているが、その出土状況から該期の居住域はさほど遠くない別の場所にあるものと推測されていた。府中石田遺跡の調査によって、その一部が確認されたものと考えられる。

古墳時代

小浜平野および周辺山麓部における古墳分布は、若狭地方でも有数の大型前方後円墳が集中する北川中流域と、小型古墳や横穴墓が山麓部を中心に群在する下流域とに分けて考えることができる。小浜平野西部域にあたる後者においては、北川の支流である多田川、遠敷川、松永川沿いが中心域となる。まず、多田川と遠敷川に挟まれた丘陵の北東端には多田古墳群(23)、同じ丘陵の北西側に検見坂古墳群(25)が展開し、あわせて100基以上が確認されている。その主体を占めるのは円墳あるいは方墳、および横穴墓である。また、多田古墳群では多田山上古墳、検見坂古墳群では九花峰古墳と呼ばれる全長40m前後の小型前方後円墳がそれぞれ確認されている。両古墳群とも埋葬設備や外部設備については不明なものが多いが、円墳数基に横穴式石室が確認されるにとどまる。なお、横穴式石室をもつ円墳は、多田川左岸の山裾でも3基が認められ、池町古墳群(18)と呼ばれている。次に遠敷川と松永川に挟まれた丘陵には金屋マンダイ山古墳群(39)・小浴神社裏山古墳群(38)が展開し、方墳あるいは円墳が計26基確認されている。また、その北西側の平地に円墳3基からなる松塚古墳群(37)が、北側に国分古墳(32)および国分寺古墳(33)が所在している。国分古墳は前方後円墳と推測され、江戸時代の出土と伝えられる中国製画文帯四仏四獣鏡1面が現存するほか、埴輪も採集されている。国分寺古墳は国指定史跡「若狭国分寺跡旧境内」(34)内に所在する。径約50mの円墳とされるが、詳細は不明である。

古代

奈良・平安時代の遺跡は多田川、遠敷川、松永川が流れる各谷の出口付近に多数分布し、この一帯が



第3図 周辺の遺跡分布図(縮尺1/50,000)

第1表 遺跡名一覧表(番号は第3図に対応)

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	木崎山城跡	城跡	中世	27	若狹彦神社・下社	神社		53	畦崎遺跡	散布地	奈良
2	木崎遺跡	散布地	古墳・中世	28	西牟久遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良	54	岡山城跡	城跡	中世
3	武田氏館跡	館跡	中世	29	下見定遺跡	散布地	弥生・古墳・平安	55	熊野山城跡	城跡	
4	後瀬山城跡	城跡	中世	30	若狹彦神社・上社	神社		56	西ノ下遺跡	散布地	奈良・中世
5	小浜城跡	城跡	近世	31	神宮寺	寺院跡		57	鳴滝遺跡	散布地	奈良・中世
6	一色氏館跡	城跡	中世	32	国分古墳	古墳	古墳	58	岡左内屋敷	館跡	
7	清水下遺跡	墳墓	平安	33	国分寺古墳	古墳	古墳	59	稲葉山城跡	城跡	中世
8	茶磨山城跡	城跡	中世	34	若狹国分寺跡	国史		60	新保田遺跡	散布地	奈良・平安
9	ハツ石古墳群	古墳	古墳	35	国分遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	61	西瀬手下遺跡	散布地	縄文・平安
10	丸山古墳群	古墳	古墳	36	下松塚遺跡	散布地	弥生・古墳・平安	62	大興寺廃寺	寺院跡	白鳳
11	羽賀砦跡	城跡	中世	37	松塚古墳群	古墳	古墳	63	岸の上下遺跡	散布地	平安
12	府中折手遺跡	散布地	縄文・中世	38	小浴神社裏山古墳群	古墳	古墳	64	天神山砦跡	城跡	
13	府中石田遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良	39	金屋マンダイ山古墳群	古墳	古墳	65	左近屋敷跡	館跡	
14	湯岡城跡	城跡	中世	40	中野氏館跡	館跡		66	明通寺	寺院跡	
15	生守・妙楽寺	寺院跡		41	丸山河床遺跡	散布地	弥生	67	茶臼山城跡	城跡	中世
16	聖谷城跡	城跡		42	高塚遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良	68	平野遺跡	散布地	奈良・平安
17	多田遺跡	散布地	奈良・中世	43	次吉城跡	城跡	中世	69	乗友遺跡	散布地	奈良・平安
18	池町古墳群	古墳	古墳	44	次吉古墳群	古墳	古墳	70	玉置遺跡	散布地	奈良・平安
19	中辻堂遺跡	散布地	弥生	45	水無谷古墳群	古墳	古墳	71	竹長城跡	城跡	中世
20	桐谷遺跡	散布地	弥生	46	扇谷古墳群	古墳	古墳	72	賀羅岳山城跡	城跡	中世
21	多田神社遺跡	包含地	古墳・近世	47	栗田古墳群	古墳	古墳	73	ガラガラ城跡	城跡	中世
22	多田寺	寺院跡		48	高塚城跡	城跡	中世	74	五両遺跡	散布地	奈良・平安
23	多田古墳群	古墳	古墳	49	高塚古墳群	古墳	古墳	75	東谷城跡	城跡	中世
24	多田山城跡	城跡	中世	50	流れ谷古墳群	古墳	古墳	76	頼政邸宅跡	館跡	
25	検見坂古墳群	古墳	古墳	51	マンダイ山古墳群	古墳	古墳	77	西川瀬遺跡	散布地	奈良・平安
26	湯谷山城跡	城跡	中世	52	栗師谷古墳群	古墳	古墳	78	大谷遺跡	集落跡	奈良

若狭国における政治的な中心地であったと推測されている。近年の発掘調査で、下見定遺跡(29)は10世紀初頭から11世紀中頃、下松塚遺跡は9世紀後半から10世紀前半、国分遺跡(35)は8世紀から10世紀にそれぞれ位置付けられ、施釉陶器や輸入陶磁器、墨書土器を含む遺物が出土している。さらに松永川の東岸に位置する西縄手下遺跡(61)では8世紀中頃から中世前期にわたる多数の遺構・遺物が検出され、注目を集めた。遺構の規模や配置は段階的に変遷するが、特に9世紀には大規模な盛土が造成され、その上に大型礎石建物や築地塀が構築される。須恵器を主体として墨書土器が多数出土するほか、硯、石帯・帯金具、皇朝十二銭といった遺物も確認されており、公的施設の存在を色濃く窺わせる。

一方、平野を挟んだ北川対岸の高塚遺跡では、庇付建物などの遺構と共に木簡や人形、さらに多量の船岡式製塩土器が検出されている。北川と松永川の合流点付近という立地から8世紀の国府津と想定され、若狭湾岸各地で生産された調塩が集積していたものと考えられている。また、府中石田遺跡・府中折手遺跡(12)においては、掘立柱建物と共に9世紀後半から10世紀前半の緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器などが検出され、やはり公的な施設の存在が考えられる。

中世

中世の主な遺跡としては、木崎山城跡(1)と同様、要衝に築かれた山城が挙げられる。木崎山城跡が立地する尾根の西方、南川が流れる谷を挟んで対面する尾根先端部には湯岡城跡(14)がある。小規模で単純な構造であるが、主要幹道である丹後街道を見下ろし、さらには小浜平野を一望できる重要な位置にある。西方には大永2年(1522)に若狭守護武田氏の一国守城として築城された後瀬山城跡(4)があり、その出城や見張所として利用されたことが推測される。湯岡城跡の成立は南北朝に求められ、若狭地方で最も古い年代を示している。湯谷山城跡(26)は永正・大永・享禄年中の築城と考えられ、城主は武田氏の被官、内藤下総守と伝えられる。広範囲に遺構が認められ、ふもとには内藤下総守館跡と伝えられる平場も存在する。なお、城域の尾根北端付近で12世紀末～13世紀に位置付けられる甕や青白磁合子の蓋片、銅銭が検出されており、かつて経塚が存在したと考えられている。遺構は城郭形成によって破壊されたと推測される。この場所は若狭一宮・若狭彦神社の下社(27)である若狭姫神社の本殿裏にあたり、造営において関連があったものと想像される。

ところで、府中折手遺跡・府中石田遺跡が所在する府中地籍は、その地名から古代・中世の政庁所在地と目されてきた。現在、古代の若狭国府については、先述のように松永・遠敷地区が有望視されているが、歴史地理学的には依然、重要な位置付けがなされており、今後の調査の進展が期待される。

参考文献

- 小浜市教育委員会 1979 『若狭の中世城館』
- 小浜市教育委員会 1986 『府中遺跡調査概報』
- 小浜市教育委員会 1992 『小浜市史 通史編 上巻』
- 小浜市教育委員会 2001 『小浜市重要遺跡確認調査報告書』
- 小浜市教育委員会 2006 『小浜市重要遺跡確認調査報告書Ⅱ』
- 中司照世 1994 「遠敷古墳群分布調査報告」『紀要』第5号 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『年報—21—平成17年度』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『年報—22—平成18年度』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『年報—23—平成19年度』

第3章 木崎山城跡の調査

第1節 遺構と遺物

木崎山城跡は発掘調査以前より、踏査によって堀切や曲輪、土橋などの存在が指摘されており、調査区内でも曲輪や堀切を容易に確認することができた(第4図)。発掘調査の結果、前述のような戦国時代の山城に関する遺構のほかに、弥生時代後期の台状墓2基、平安時代の経塚1基、鎌倉時代の経塚1基を確認し、複合遺跡であることが明らかとなった(第5図)。以下、遺構ごとに内容と出土遺物について記述する。

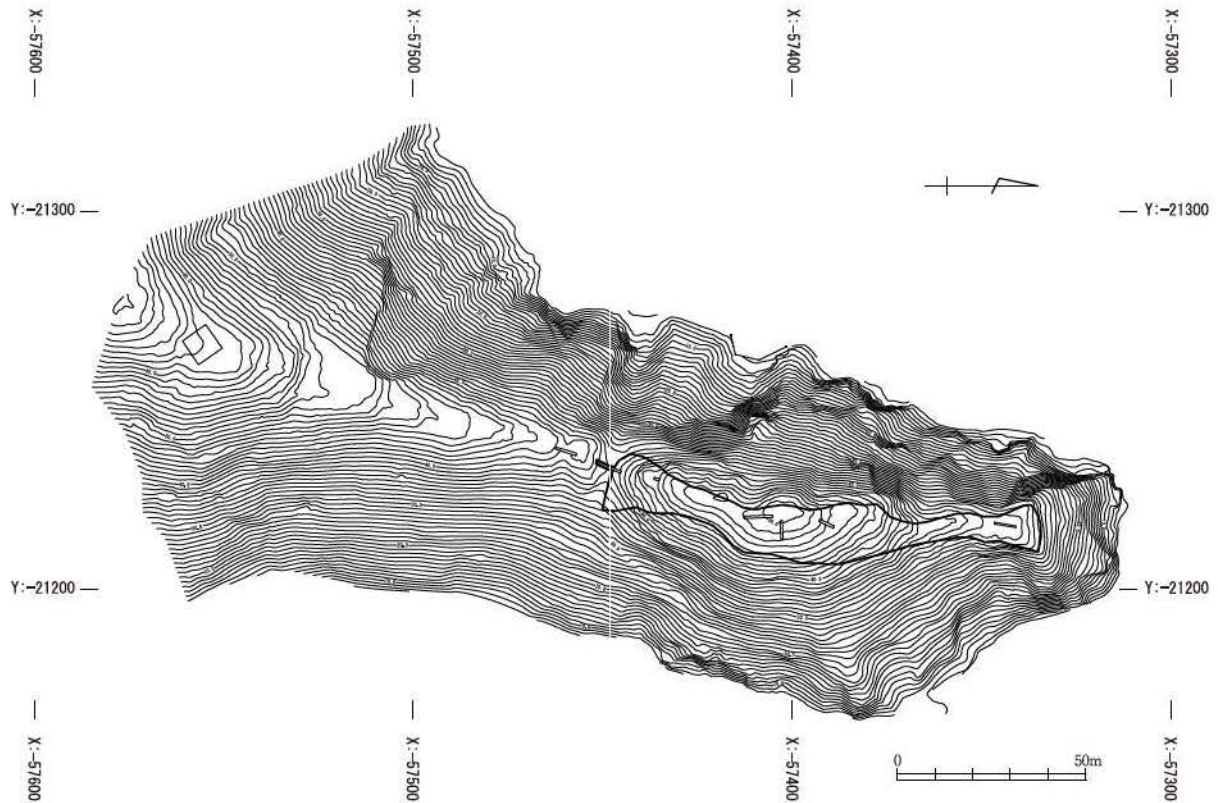
1 台状墓

1) 台状墓1 (第6～8・23・24図、第2・3表)

調査区内で最も標高が高いところ(50.08～49.00m)にある。当初は曲輪のみを想定していたために確認が遅れる事態を招き、埋葬施設2を完掘することができなかった。

墳頂部のみを整形しており、裾部を人工的に改変した痕跡は認められない。墳頂平坦面は、曲輪造成時の盛土と、経塚1の集石で覆われていた。南北方向に長軸をもつと考えられ、その規模は17.00mを測る。ただし、南側の境界はあまり明瞭ではない。短軸は、平坦面西側が台状墓造営後に大きく崩落したとみられることから、現在の2倍以上(10.00m前後)であったと推測される。平坦面の平面形は隅丸長方形と考えられる。平坦面やその東側斜面からは弥生土器が少量出土している。

埋葬施設 平坦面の南寄りで2基の埋葬施設を確認した。東西方向を長軸として並び、いずれも地山の岩盤を削り貫いて造られている。西側は転落防止の柵外にのびているため、掘ることができなかった。



第4図 現況測量図(縮尺1/2,000) 囲んだ部分が調査範囲

埋葬施設1(第7・8図、第2表) 墓壙は短軸4.45m、最下底までの深さ1.32mを測り、平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。主軸は東西方向で、尾根に対して垂直である。棺を安置した場所は一段深くなっており、棺底が弧状を呈することから、刳抜式木棺が納められていたと推測される。土層断面から推測される木棺の復元値は幅1.90m、高さ1.04mを測る。

埋葬施設1では、弥生土器が出土している。図示したもののうち、壺(1)と高坏(5)は墓壙の東壁際から、壺(2)と高坏(3・4)は木棺上とその南側から出土している。

壺(1)は、外傾する有段口縁の外面に擬凹線を施す。壺(2)は球形の胴部を呈し、口縁部を除いてほぼ完形である。高坏(3)は坏底部と口縁部の境に明確な稜をもち、口縁端部に面を有する。高坏(4)はハの字状にひらく脚部である。高坏(5)は坏部が有段口縁の鉢形を呈し、口縁部外面に擬凹線を施す。

埋葬施設2(第7・8図、第2・3表) 墓壙は短軸3.20m、最下底までの深さ2.00mを測る。主軸は埋葬施設1よりも、やや南に振れる。土層断面の観察から刳抜式木棺の存在がうかがえ、その復元値は外法で幅1.73m、高さ1.20mを測る。埋葬施設1より0.70m深く掘り込まれており、台状墓1の中心埋葬と考えられる。

埋葬施設2では、鉄剣と弥生土器が木棺上で出土している。鉄剣(9)は切先を北に向けていた。弥生土器は高坏、器台、脚台を確認している。

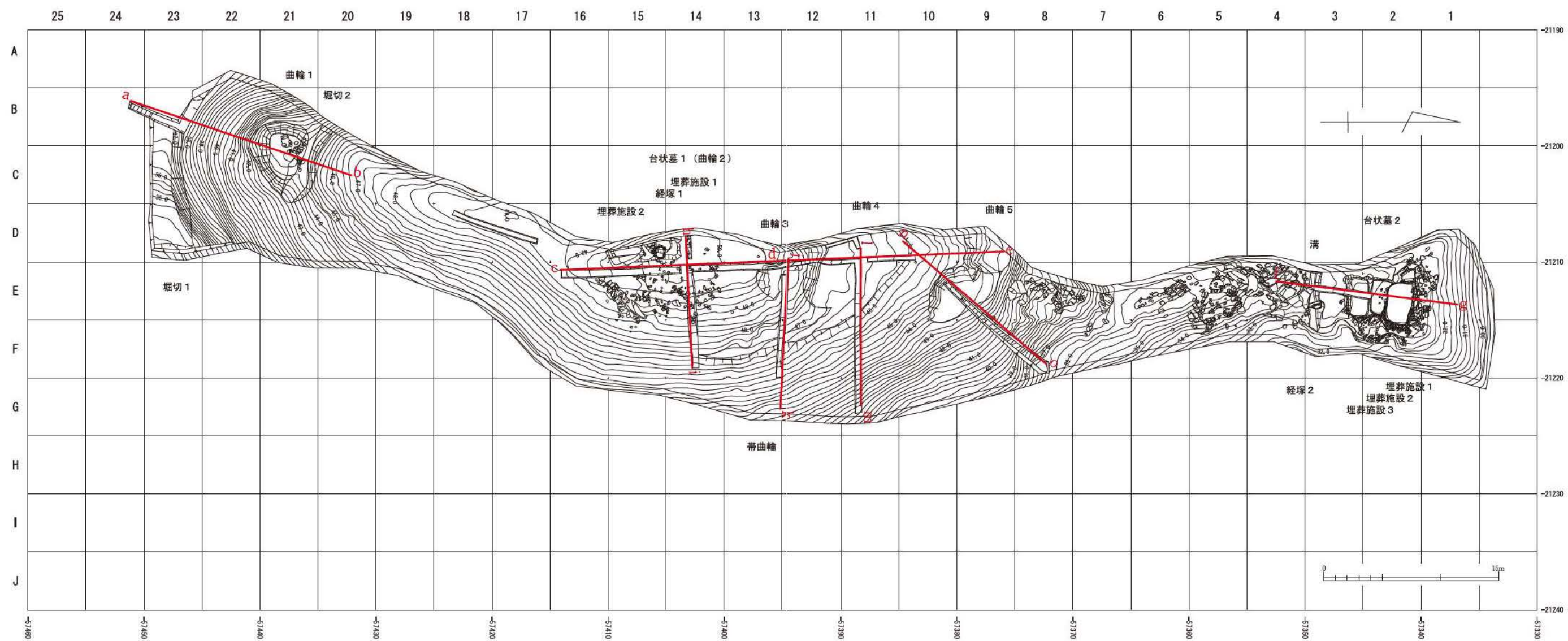
高坏(6)は坏底部と口縁部の境に明確な稜をもち、口縁部が外反する器形を呈するもので、口縁端部を肥厚させる。脚柱部は長めで、坏底部外面に棒状工具を刺した痕跡が残る。貫通しておらず、製作に関わるものと理解される。器台(7)は口縁端部に面をもち、口縁部下端を垂下させる。口縁部外面には擬凹線を施す。脚台(8)はハの字状にひらく器形で、底部中央に穿孔が見られる。鉄剣(9)は短剣に類する。鋒と茎尻を欠損している。刃部の断面形状は杏仁気味の菱形で明確な鑄はない。鋒に至ってもほとんど変化しない。関は直角関である。茎部は中細で、断面は長方形を呈す。

埋葬施設1・2は、出土遺物から弥生時代後期後半に属すると考えられる。出土遺物や土層断面の観察から埋葬施設1が埋葬施設2よりも新しいと判断されるが、埋葬施設1が埋葬施設2をあまり壊さないように掘削されていることなどから、埋葬施設2の位置を確認できるうちに、大きく時間を空けずに造られたと考えられる。同じ墓域に近接して設けることから、被葬者同士は近縁関係にあると推定される。

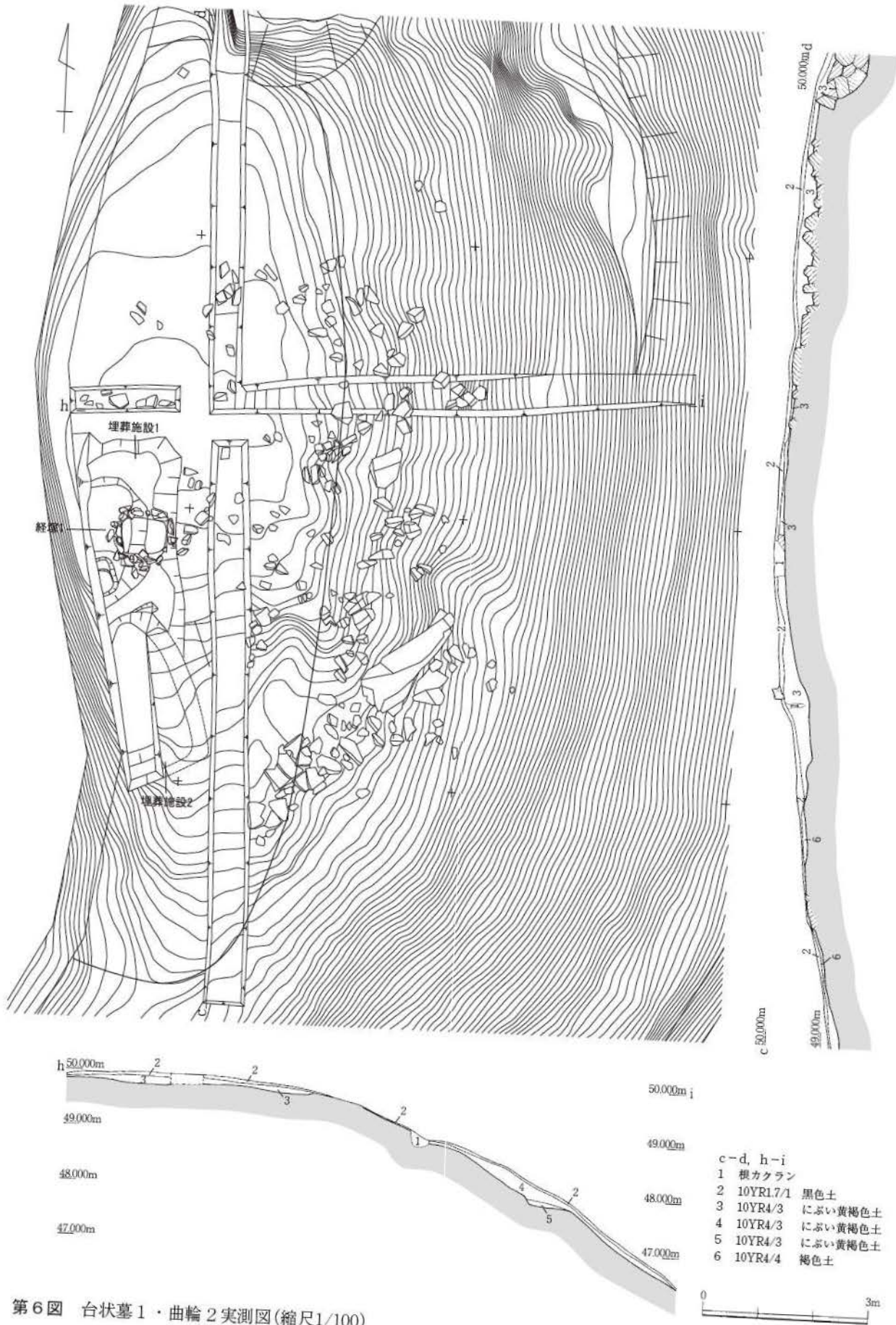
2) 台状墓2(第9～14図、第2・3表)

丘陵先端部にあり、標高は32.60～33.60mである。岩盤を削り出して平坦面を作り、墓域としている。墳丘としての明瞭な裾部は造り出されておらず、土層断面の観察から盛土は存在していないと考えられる。平坦面は南北9.00～9.60m、東西5.70～6.50mを測る歪な方形を呈し、南(山)側は溝によって区画されている。溝は尾根に対して垂直に掘られており、断面形はU字状を呈する。直線的な溝で、確認できた長さは5.14mで、幅は0.89～2.06m、平坦面からの深さは0.40～0.60mを測る。

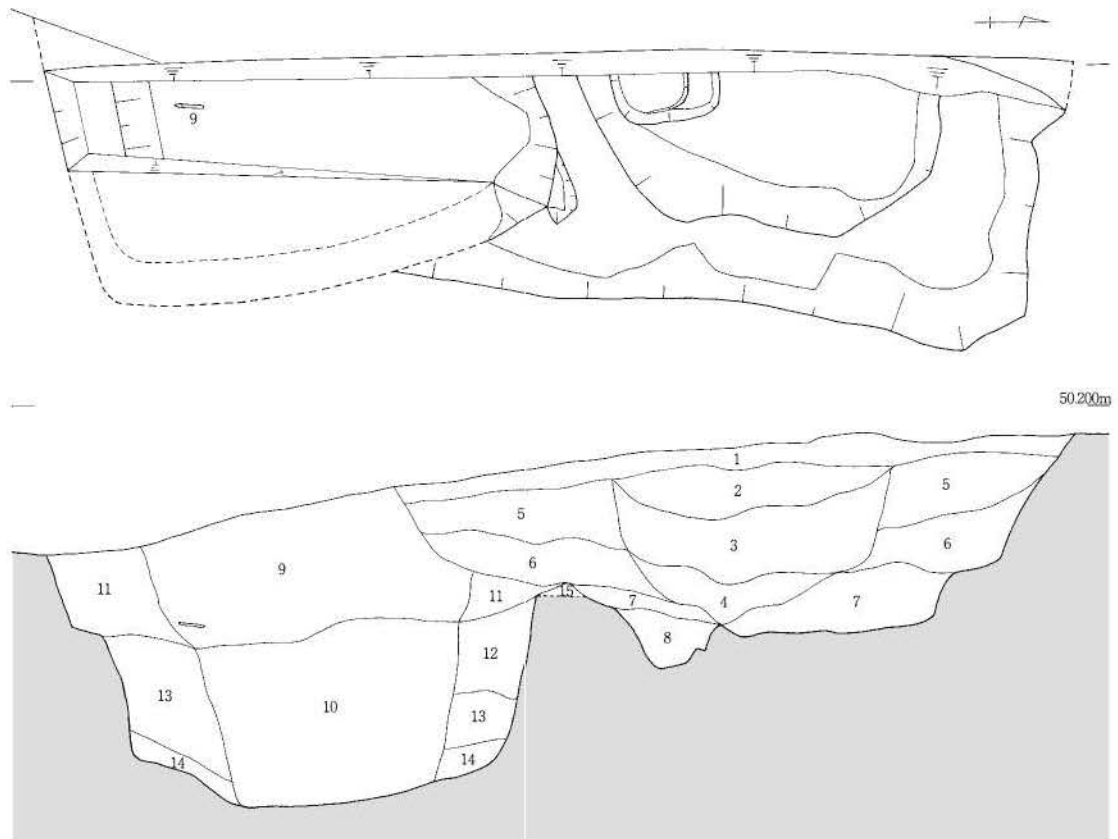
平坦面やその東側斜面、溝などから弥生土器が出土している。溝や斜面では少量の破片がみられたただけだが、平坦面上には多数の細片が散在していた。脚部(2)と高坏(3)が2層、器台(4)が3層から出土しており、その出土位置は後述する埋葬施設の上面、即ち脚部(2)が埋葬施設1の南東隅付近、高坏(3)と器台(4)が埋葬施設3の北壁寄りに当たるが、明確に各埋葬施設に伴うとは言い難い。また、東側斜面で壺(1)、台状墓2の溝を切って構築されている経塚2の土坑内で器台(5)が出土している。これらは、平坦面上にあった供献土器が転落したものと考えられる。



第5図 全体図(縮尺1/300)



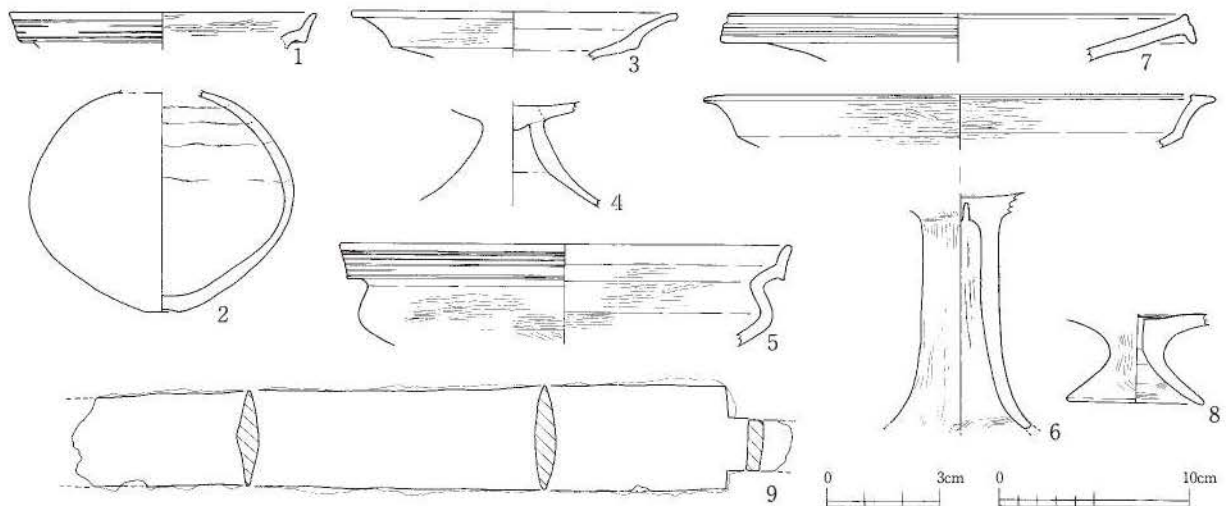
第6図 台状墓1・曲輪2実測図(縮尺1/100)



埋葬施設1			埋葬施設2		
1 10YR4/4 褐色土	5 10YR5/6 黄褐色土	9 10YR5/6 黄褐色土	13 10YR5/4 にぶい黄褐色土		
2 10YR2/3 黒褐色土	6 10YR5/6 黄褐色土	10 10YR4/4 褐色土	14 10YR5/6 黄褐色土		
3 10YR4/4 褐色土	7 10YR4/6 褐色土	11 10YR5/6 黄褐色土	15 10YR5/6 黄褐色土		
4 10YR4/4 褐色土	8 10YR4/6 褐色土	12 10YR5/6 黄褐色土			



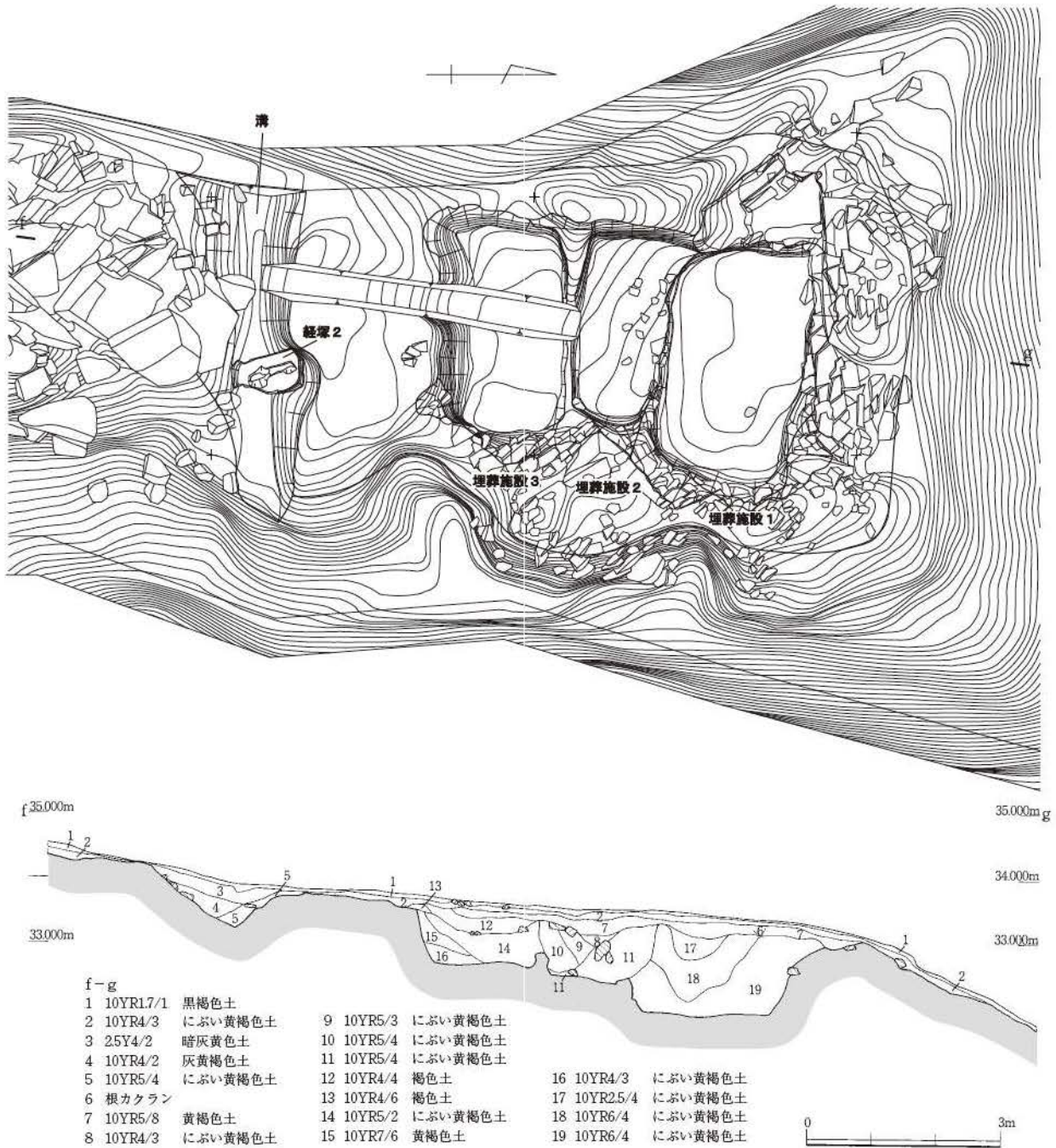
第7図 台状墓1・埋葬施設1・2実測図(縮尺1/50) 図中の番号は第8図に対応



第8図 台状墓1出土遺物実測図(1~8:縮尺1/4, 9:縮尺1/2)
1~5:埋葬施設1, 6~9:埋葬施設2

短頸壺(1)は環状の把手が付くもので、ほぼ完形である。倒卵形の胴部に直立する短い口縁部をもち、口縁部外面には1条の沈線を施す。脚部(2)はハの字状にひろく器形で、口縁端部は狭小な面をもつ。高坏の脚部(3)は、坏底部に小孔2孔を穿つ。器台は、口縁端部が外反する短い有段の口縁部をもち、口縁下端を垂下させるもの(4)と口縁部を下方に垂下させて面を形成するもの(5)がある。

埋葬施設 平坦面のほぼ中央で3基の埋葬施設を確認した。埋葬施設は東西方向を長軸として並列し

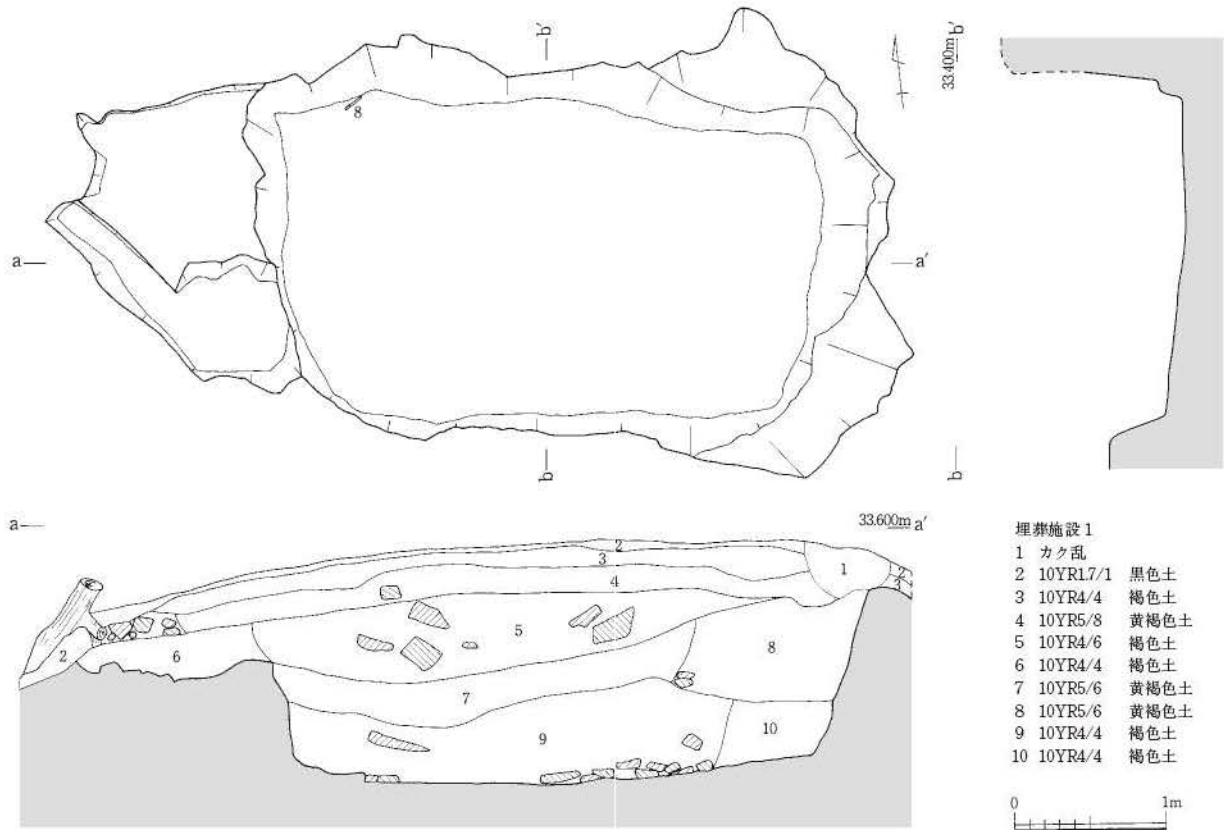


第9図 台状墓2実測図(縮尺1/100)

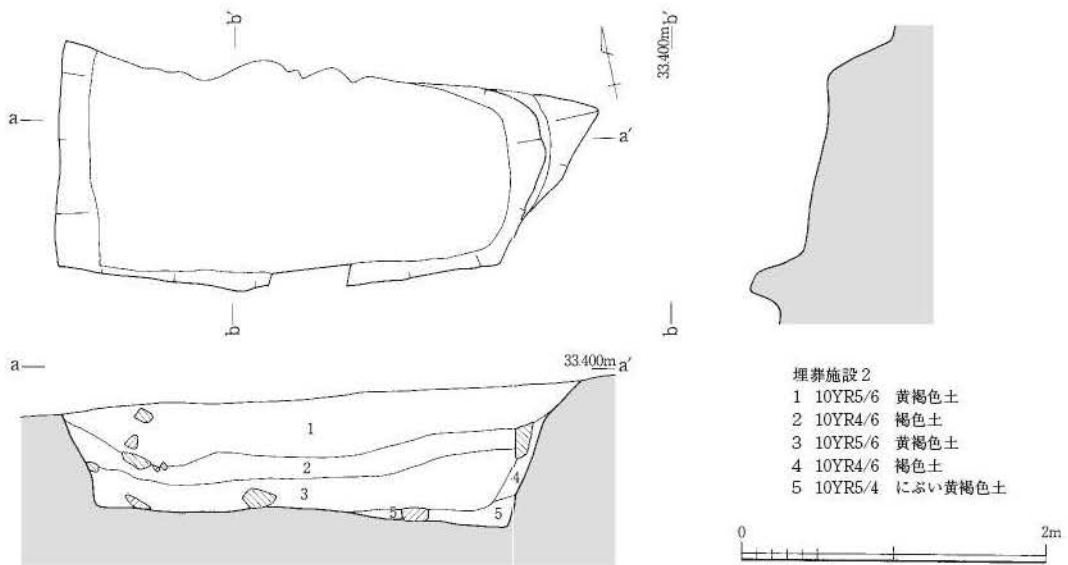
ており、いずれも岩盤を削り貫いて造られている。

埋葬施設1(第10・13図、第2・3表) 墓壙上面のほぼ中央で縦0.23m、横0.12m、厚さ0.11mを測る円礫を確認しており、これは山陰や北陸において標示石等とされているものの可能性がある。また、同様の円礫が溝の覆土上面でも出土しており、台状墓2の平坦面から転落したものと推測される。この円礫は縦0.26m、横0.16m、厚さ0.08mで埋葬施設1の上にあった円礫とほぼ同じ大きさである。

墓壙は長軸4.20m、短軸2.40~2.70m、最下底までの深さ1.30mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。埋葬施設1の規模は、ほかの2基の埋葬施設より隔絶して大きく、この墓域の中心埋葬であると考えられる。東側小口部分には棺の裏込として詰められた土(8層)が認められ、木棺の存在がうかがえる。推定復元される木棺の規模は外法で長軸2.92m、短軸1.30m前後、高さ0.68mである。墓壙底面の傾き



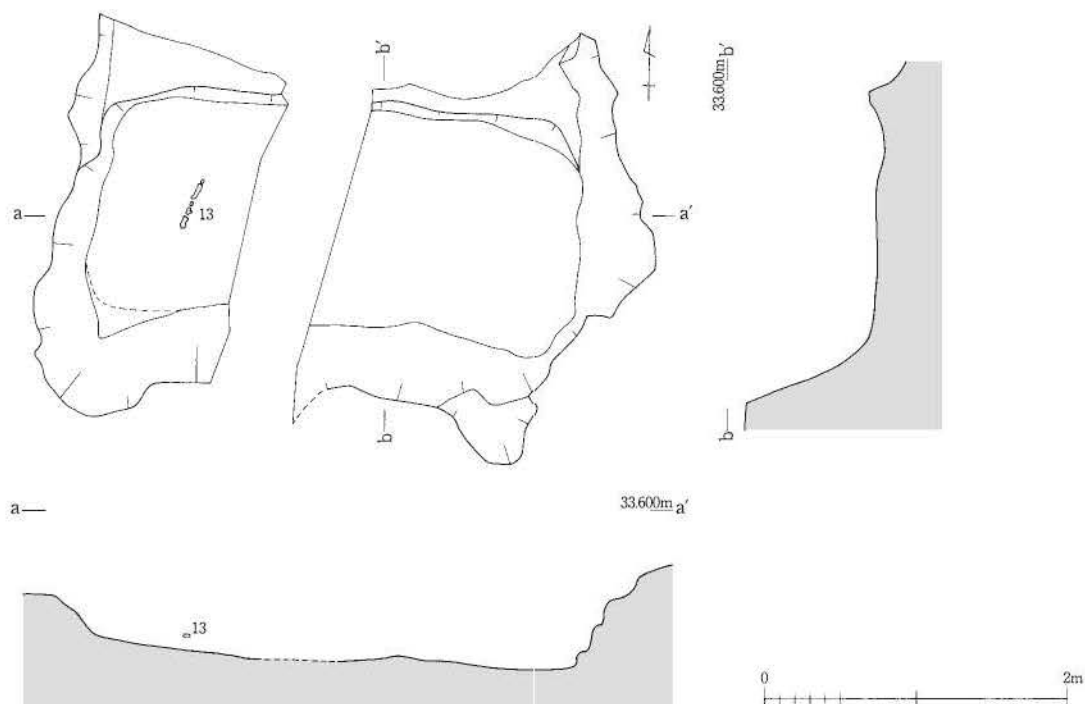
第10図 台状墓2・埋葬施設1実測図(縮尺1/50) 図中の番号は第13図に対応



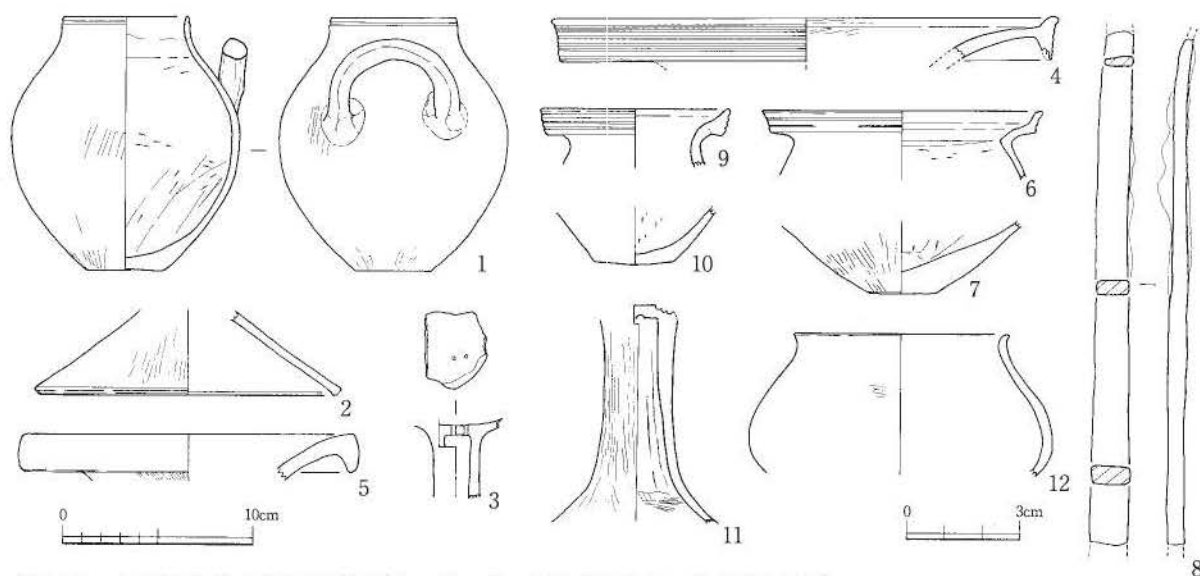
第11図 台状墓2・埋葬施設2実測図(縮尺1/50)

から、頭位は西と考えられる。また、埋葬施設1の西側は平坦面より0.30m掘り込まれており、ここから遺骸を納めたのではないかと推測される。平面形は西側が狭くなる歪な台形を呈し、東辺が2.10m、西辺が0.76m、東辺と西辺の間の距離が1.11mを測る。南側は0.04~0.14m低くなっている。

埋葬施設1では弥生土器と鉄製品が出土しており、特に墓壇の北西隅付近では遺物の集中がみられる。図示した底部(7)と鉄製鉾(8)は、墓壇底面から0.70m前後の高さで出土している。鉾(8)は刃先を西に向けていた。弥生土器の甕(6)は墓壇の中央やや南寄り、最下層で出土した。復元できなかったが、同一個体と考えられる胴部が北西隅付近に散在しており、墓壇内破碎土器供献をうかがわせる。



第12図 台状墓2・埋葬施設3実測図(縮尺1/50) 図中の番号は第14図に対応

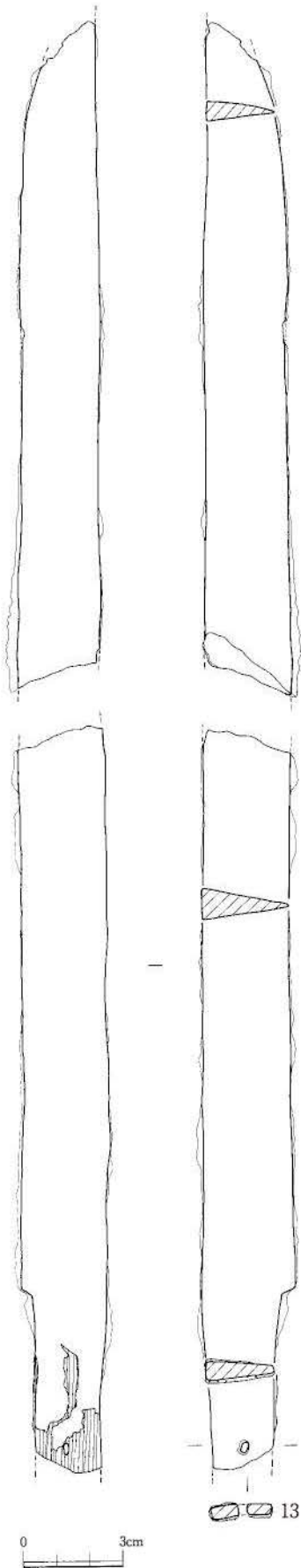


第13図 台状墓2出土遺物実測図(1~7・9~12:縮尺1/4, 8:縮尺1/2)
1:東南斜面, 2~4:墳頂部, 5:溝, 6~8:埋葬施設1, 9~11:埋葬施設2, 12:埋葬施設3

甕(6)は外傾する有段口縁をもち、口縁部外面に擬凹線を施す。底部(7)は平底を呈する。鉋(8)は、刃部先端を欠損している。刃部は上方の反りが認められる。茎幅は刃部に至るまでほとんど変化しない。断面は隅丸方形を呈する。

埋葬施設2(第11・13図・第2表) 長軸3.22m、短軸1.84m、墓壙最下底までの深さ0.93mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。東側小口部分には棺の裏込として詰められた土(4・5層)が認められ、棺材などは遺存しないものの、木棺の存在が考えられる。推定復元される木棺の規模は長軸3.00m、短軸1.50m前後、高さ0.90mである。墓壙底面の傾きから、頭位は西と推測される。

埋葬施設2の出土遺物は、墓壙上面で確認された遺物も含めて少量であり、弥生土器に限定される。壺(9)が中央西寄り、底部(10)と高坏脚部(11)が北壁中央付近で出土している。



第14図 台状墓2・埋葬施設3
出土遺物実測図(縮尺1/2)

壺(9)は直立する有段口縁をもち、口縁部外面に擬凹線を施す。底部(10)は平底を呈する。高坏脚部(11)は脚柱部が長めで、第8図6と同様に坏底部外面に棒状工具を刺した痕跡が残る。

埋葬施設3(第12~14図・第2・3表) 長軸3.64~3.84m、短軸2.00m、墓壙最下底までの深さ0.75mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。断面観察から埋葬施設1・2と同様に木棺が納められていたと推測される。また、墓壙底面の傾きや副葬品の位置から、頭位は西と考えられる。

埋葬施設3の出土遺物は、弥生土器と鉄製品である。墓壙上面では弥生土器の破片が墓壙全体に散在していた。前述した脚部(3)と器台(4)もその一部である。壺(12)は底面付近で出土している。破片は中央南寄りに散在しており、墓壙内破碎土器供献の可能性はある。鉄刀(13)は墓壙底面で出土したもので、西壁に平行してあり、切先を西に向けていた。

壺(12)は球形の胴部に短く外反する口縁端部をもつ。鉄刀(13)は平造の直刀で、鋒と茎尻は欠損する。刃身幅は鋒に至ってもほとんど変化しない。関は斜角関の片関である。茎部の目釘穴付近に木質が遺存する。目釘孔が1箇所認められる。

出土遺物から、これらの埋葬施設は弥生時代後期後半から末にかけて造られたと考えられる。また、土層断面の観察から、埋葬施設2が最後に掘削されたことは明らかである。埋葬施設1と埋葬施設3の前後関係は土層断面からはうかがえないが、埋葬施設1が中心埋葬であることから、埋葬施設1が最初に営まれたと推測する。

上述のように埋葬施設1、埋葬施設3、埋葬施設2の順に造営されたと考えられるが、埋葬施設1は平坦面の中央よりもかなり北側に寄っており、当初から複数の埋葬施設の掘削を想定していたことがうかがえる。加えて3基の埋葬施設が主軸を揃えて並列していることなどから、他の埋葬施設の位置を確認できるうちに、連続して造られたと考えられる。同じ墓域に大きく時間を空けずに造られており、被葬者は近縁関係にあると想像される。

2 経塚

1) 経塚1(第15~18図、第2・4~7表)

調査区内で最も標高が高い平坦面で確認した。標高は50.70mである。この平坦面は台状墓1を造営する際に整えられたものであり、経塚1はその埋葬施設1を切って作られていた。南北3.10m、東西2.56mの範囲に、方形に多数の角礫と一部に円礫が集積している状

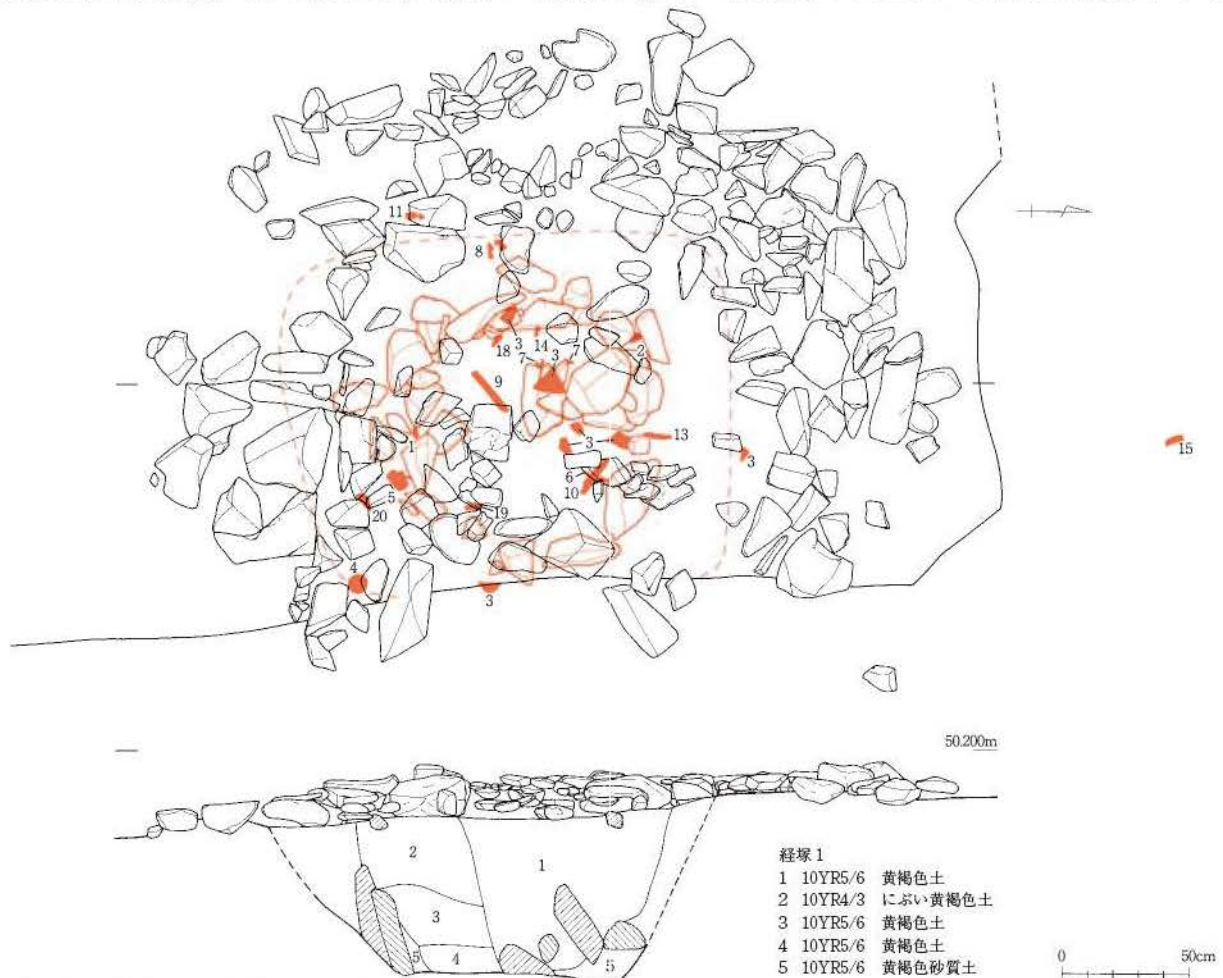
態で確認したもので、その南東隅の礫の上では銅製鏡1面(4)が鏡面を下にして出土した。礫は、0.05～0.40mの大きさで、拳大から人頭大である。この集石の下には土坑が掘られており、その東壁際には東西方向を長軸とする長方形の石組が設けられていた。石組には0.10～0.35mの大きさの角礫を使用しており、内法で長軸0.84m、短軸0.71m、深さ0.50mを測る。

石組内からは刀子4口(9・10・12・14)、鉄鏃1点(7)、火打金2点(18・19)、不明鉄器1点(16)、銅製経筒蓋の破片1点(6)、常滑焼の短頸壺(3)などが出土した。このうち5点(7・9・12・14・18)は床面直上で確認しているが、元位置を保っているとは考えられない。

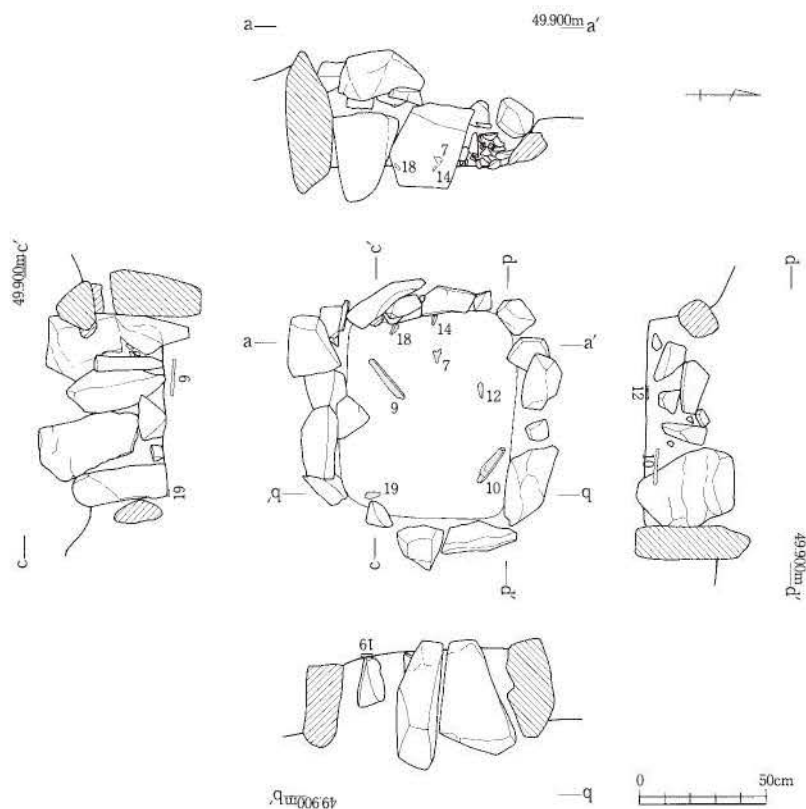
経塚1は石組の北西隅が人為的に崩されており、盗掘を受けていると考えられる。その際に経筒外容器と推測される常滑焼の短頸壺も壊されたとみられ、その破片は石組内だけではなく、平坦面とその東側斜面にも散在していた。また、その中に納められていたと考えられる経筒は蓋の破片のみが出土し、本来は石組内に副納されていたと考えられる刀子3点(11・13・15)、鉄鏃1点(8)、火打金2点(17・20)、銅製鏡(5)、青白磁合子の蓋1点(1)、青白磁の小壺の蓋1点(2)が、石組の外で出土した。

青白磁平型合子の蓋(1)は、印籠蓋と呼ばれるものである。体部に型造りの菊座をもち、天井部には型押しによる6分割の精緻な印花文の浮き出しがみられる。青白磁小壺の蓋(2)は、小型の鈕を花心として周辺に浮き出し文を施し、内面には返りをもつ。両者とも12世紀に比定される。

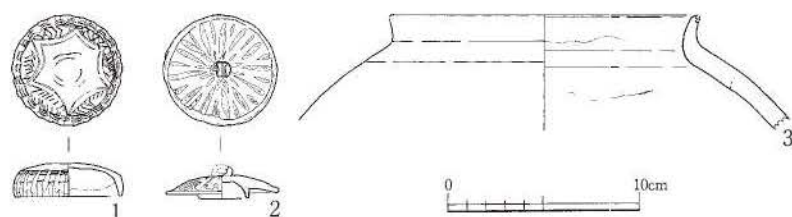
経筒外容器と推定される短頸壺(3)は常滑焼で、1.5cmの高さを持つ頸部が垂直気味に立ち上がる。成形は粘土紐輪積みで、内面に丁寧な横ナデを施す。赤羽・中野編年の1a型式～3型式に比定される⁽¹⁾。



第15図 経塚1実測図(縮尺1/30)
 図中の番号は第17・18図に対応



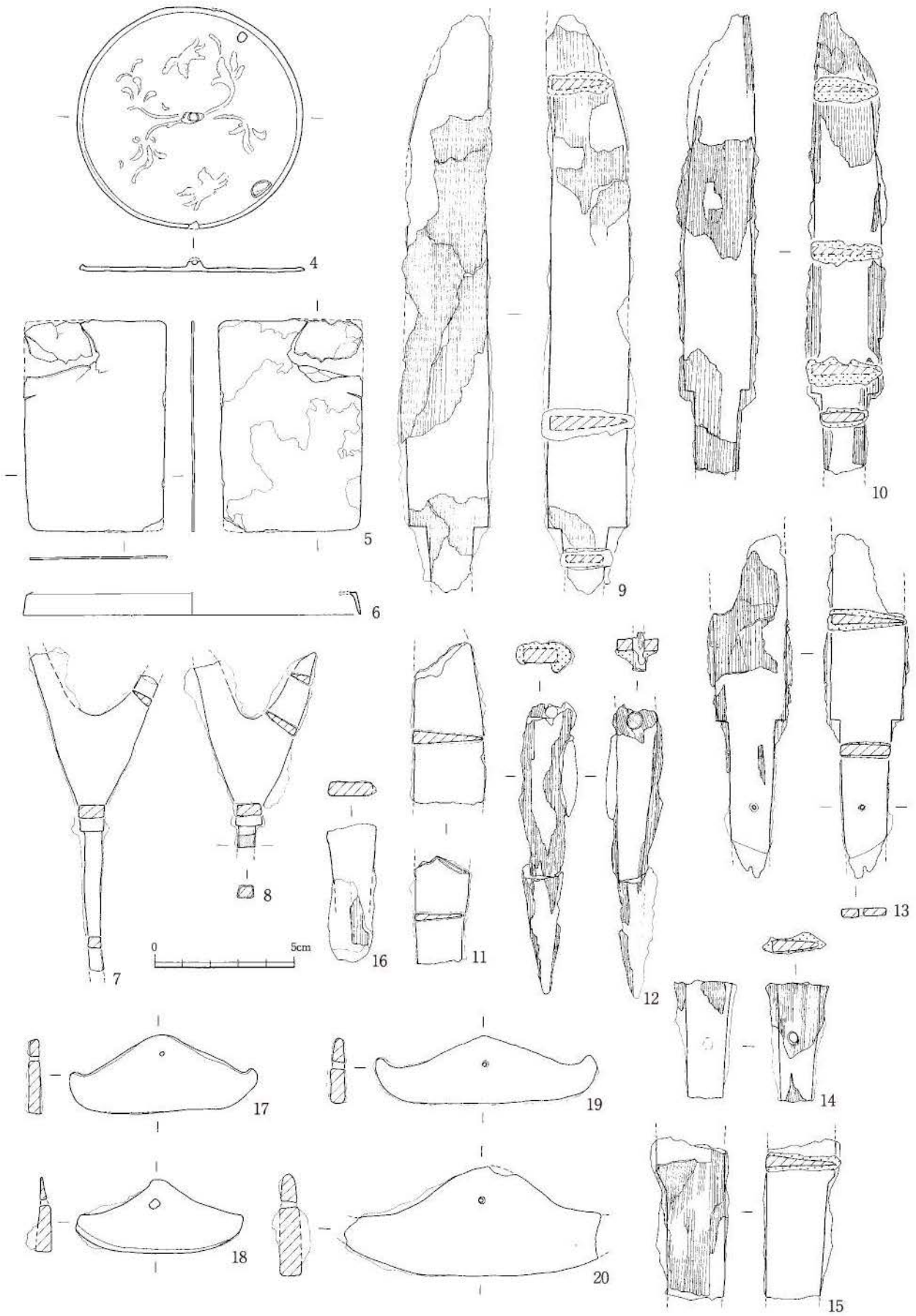
第16図 経塚1石組実測図(縮尺1/30) 図中の番号は第18図に対応


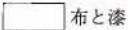



第17図 経塚1出土遺物実測図1(縮尺1/4)

回る。外縁は復元でき、蓋天井部との屈曲部が確認できる。鉄鏃(7・8)は有頸鏃で、鏃身部の形態が雁股形を呈する。7は鏃身部が弓なりに屈曲している。小型で断面は片丸造を呈す。茎部から刃部に至る頸部が長く、篋継部は下方が幅広い。8は刃部の幅が狭く、断面は片丸造を呈す。茎部は良好に残存しており、篋継部は下方が幅広く、樹皮巻きの痕跡が遺存する。刀子(9~15)は両関のものが大半を占める。9は平刃造で、鋒と茎尻は欠損している。刃部幅は鋒に至っても変化せず、鋒は剣先状を呈する。刃部に木質が付着し、鋒付近に良好に遺存する。このことから鞘付きで埋納された可能性がある。関は、背側が直関、刃側が直関の両関である。関部から茎部にかけて木質が遺存する。10は平刃造で、鋒と茎尻は欠損している。刃部上方に木質が遺存する。茎は背側は直関、刃側は直関の両関である。関~茎部の側面に木質が付着していた。茎部の断面は隅丸方形を呈し、木製把装具の木質が遺存している。11は平刃造の刃部と茎部的一部分のみが遺存する。双方の幅から勘案すると同一個体になる可能性が高い。12は平刃造で、刃部は欠損している。茎部には木製把装具が茎尻まで良好に遺存している。断面は楕円形を呈し、組み合わせ式の柄と想定される。側面の木質の外面には把装具外面の漆塗の付着が確認できる。茎部は茎尻に向かってゆるやかに幅を減じる。目釘部付近は木質が遺存し、目釘は鉄製である。13

金属製品は、銅製鏡2面(4・5)、銅製経筒蓋の破片1点(6)、鉄鏃2本(7・8)、刀子7口(9~15)、不明鉄器1点(16)、火打金4点(17~20)が出土している。いずれも平安時代後期から鎌倉時代前期に収まる資料である。瑞花双鳥鏡(4)は青銅製で、外縁は蒲鉾式の細縁の突帯がめぐる。鏡面の断面は外縁部が上面にゆるやかに反り、紐の穿孔は円形である。内区の文様は花鳥文で、紐部より左右に4方向に蔓が配される。ほぼ中央軸線上に2羽の鳥が配される。印刻線は摩耗が激しい。鏡背の縁近く1箇所には鑄継痕が認められ、もう1箇所は穿孔が認められる。12世紀第4四半期から13世紀初頭のものと考えられる。銅製方鏡(5)は、青銅製で平面は隅丸長方形を呈す。背面は紙繊維に似た物質の付着が認められ、印刻線は確認できない。経筒の蓋(6)は、青銅製で口縁部が円形に



第18図 経塚1出土遺物実測図2 (縮尺1/2)  布  布と漆  木質

は平刃造で、刃部上半と茎尻は欠損している。刀部に木質が付着する。関は背面は直関、刃側は直関の両区である。茎部の断面形状は長方形を呈す。目釘穴一箇所が認められる。14は、刃部・茎尻共に欠損している。目釘穴が一箇所が認められる。茎部ほぼ全域に木質が遺存している。15は平刃造の関～茎部が遺存する。関は刃側は斜関の片関である。刃部・茎部共に木質が良好に遺存しており、木製把装具を装着した状態で埋納された可能性がある。16は不明鉄器であるが、刀子の茎部と考えられる。茎部付近に木質が遺存する。火打金(17～20)は、三角形2点(17・19)、「山」字型2点(18・20)が出土した。17は頂部中央に一孔を有し、使用による一部凹凸が認められる。18は頂部中央に一孔を有する。打撃部は、わずかに一部分が内湾する。19は頂部下に一孔を有し、打撃部の一部分に凹凸が認められる。20は両端がゆるく反り、頂部下に一孔を有する。いずれも、鶴見氏の分類のI D a型に分類される⁽²⁾。打撃部の内湾が少ないことから、使用頻度が少ないことが想定される。

豊富な副納品をもつ点や、常滑焼の時期などから、造営時期は12世紀後葉と考えられる。

2) 経塚2(第19・20図、第2・8・9表)

丘陵先端部にあり、標高は33.47mである。経塚1とは56.50m離れており、その比高差は16.61mを測る。台状墓2の溝に重複して作られており、溝を掘削する途中で経塚と認識した。このため、埋納部を構築した土坑の掘形については、土層断面図からの復元であることをお断りしておく。

埋納部を構築した土坑は南北方向に長軸をもち、長軸1.63m、短軸1.00m、深さ0.54mを測る楕円形を呈していたと考えられる。底面は溝底面の岩盤を削り貫いており、長軸1.13m、短軸0.62m、溝底面からの深さ0.10～0.05mを測る歪な長方形を呈する。この土坑の南側に寄せて平石(台石)を置き、その上に経筒を安置し、越前焼の甕を逆位にして被せている。台石の南を除いた3方は4つの角礫で囲み、台石を固定している。台石の下は、角礫1石と岩盤から剥離した石1石と掘り返した土を使って平坦になるよう整えている。台石や台石を囲んだ4つの石の下層には銭貨11枚が散在しており、台石とそれを囲む角礫を設置する前に銭貨を撒いたことがわかる。このうちの2枚は、最下層にある岩盤から剥離した石の下から垂直に立った状態で出土しているが、これは整地する際に潜り込んだものと考えている。また甕を設置した台石の上やその周辺からも銭貨3枚が出土している。こうした銭貨は、地鎮を目的として用いられていると考えられる。ひとつの経塚から14枚もの銭貨が出土したのは珍しい例である⁽³⁾。

なお、当地域には主土坑の側面に横穴を穿ち、そこに経筒を埋納する事例がみられるが、経塚2では遺構確認面から越前焼の甕底部までの深さはわずかに0.04mであり、横穴の存在は認識できなかった。

経塚2は、以下の手順で造営されたものと考えられる。①長軸1.63m、短軸1.00m、深さ0.54mを測る楕円形の土坑を掘る。底面は地山である岩盤を削り貫いて作っており、長軸1.13m、短軸0.62m、溝底面からの深さ0.10～0.05mを測る歪な長方形を呈する。底面の南側には岩盤の剥離によってできた径0.30mの凹みがある。②土とともに剥離した地山の石を再利用して凹みに置き、その上に土と平らな角礫を置いて底面を整える。この角礫は運んできたものであり、この角礫の周辺に11枚の銭貨を撒く。③運んできた平らな石を台石とすべく、②の上に置く。④巨石が露出している南側を除いて、台石を囲むように、運んできた角礫4石を配置する。⑤台石の上に経筒を置く。⑥経筒の上から越前焼の甕を被せる。⑦銭貨3枚を蒔く。⑧土を被せて埋める。

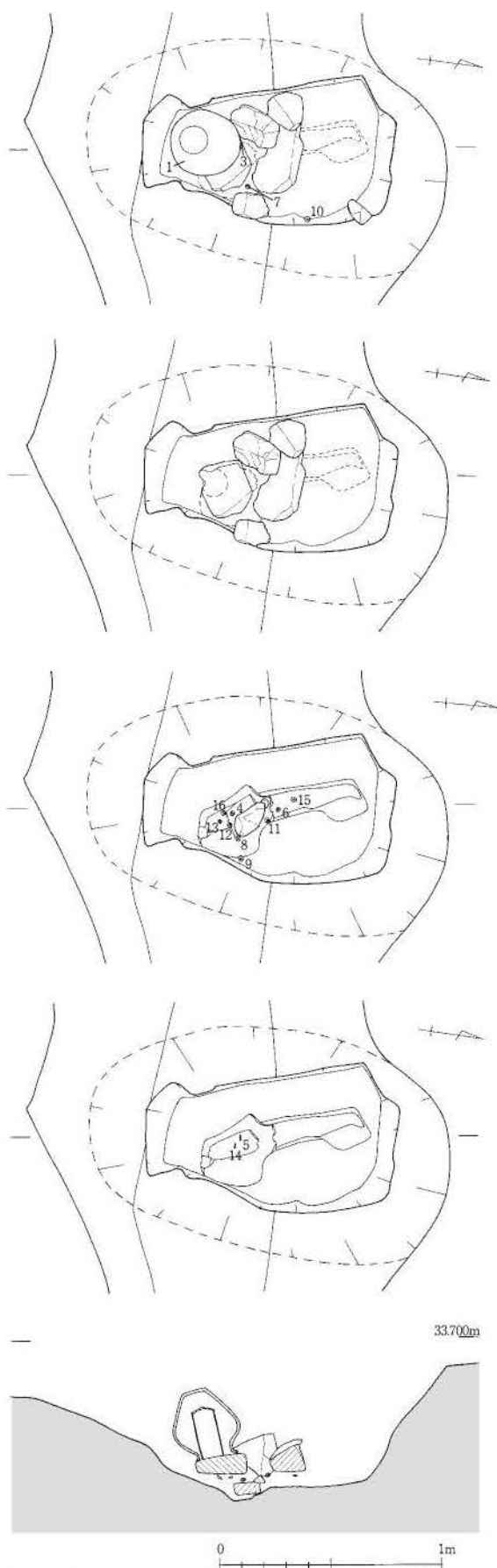
経筒外容器の甕(1)は越前焼である。幅の広い受け口状口縁で1cmの狭い縁帯を持ち、端部がやや上方に摘み上げられる。胴部上位でなだらかに肩が張り、内傾気味に立ち上がる頸部から、ほぼ90度に屈曲して口縁部へ至る。成形は6段の粘土紐輪積みで、胴部下半に縦方向の成形痕を残す。最終調整と

して胴部上半にナデが施されているが、特に頸部から口縁部にかけて丁寧な横ナデがなされる。自然釉は、火表の一部では底部まで垂れ落ちる。また底部外面には、馬爪焼台の痕跡が2箇所みられる。13世紀前半に比定される。

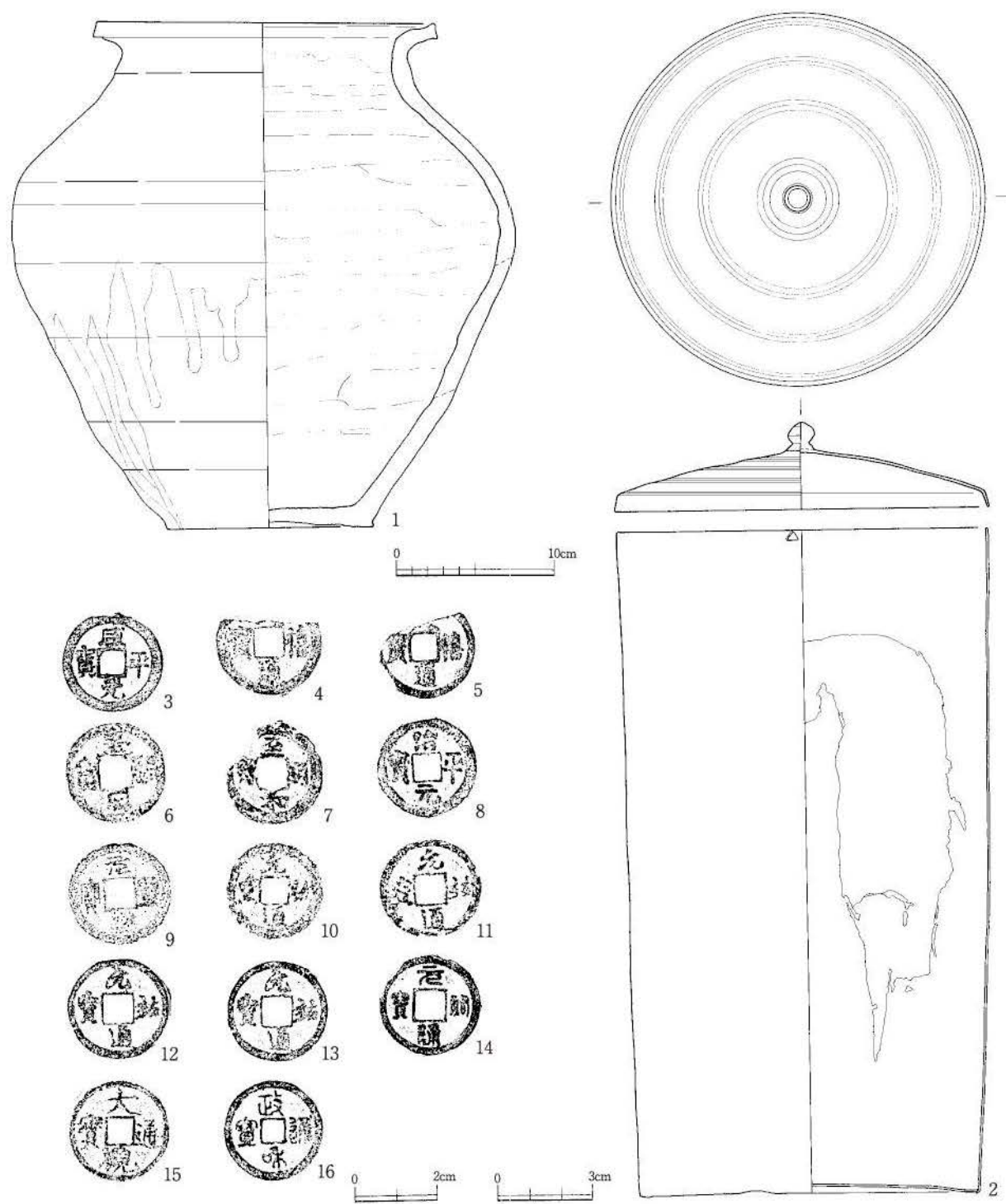
金属製品は、青銅製経筒(2)、銭貨14枚(3~16)が出土している。平安時代後期から鎌倉時代前期に収まる資料である。経筒(2)は、銅鑄製の一段盛蓋式の筒身と蓋が完形である。蓋は、ゆるやかなドーム状を呈する。銅製の被せ蓋式で宝珠状のつまみが付く。口縁部は口縁外方に向かい開く形状を持つ。外面には3条単位の沈線を3条、同心円状に配す。筒身は、ほぼ寸胴を呈し、口縁部に向かって少し口径を大きくする。口縁部に上方に頂点を持つ三角形状の穿孔がある。底部底板は入底式で、筒部の下部を0.2cm程度の内側への折り返し部を受け口とし、下から底板を支える。底板の断面は凸レンズ状を呈する。経筒の内側には朱で文字の書かれた紙片が付着しており(巻首写真1)、底には剥がれ落ちた紙片と黒い固形物が見られた。紙は楮を用いたものと分析された。また、黒い固形物はゆるく曲がった棒状のもの5~10点が絡みあったような形態をしており(写真図版10)、当初は炭化した紙本経と考えていたが、分析の結果、紙ではなく、粘土質の鉱物が凝集固化したものの可能性が高いと判断された。

出土した銭貨は全て北宋銭で、おおむね11~12世紀の範疇に収まる。最も古いものは初鑄998年の咸平元寶で、初鑄1111年の政和通寶が最も新しい。下記に降順に記述してゆく。3は初鑄998年の咸平元寶である。4・5は初鑄1017年の天禧通寶である。6は初鑄1039年の皇宋通寶である。7は初鑄1054年の至和通寶である。8は初鑄1064年の治平元寶である。9は初鑄1078年の元豊通寶である。10~14は初鑄1086年の元祐通寶である。15は初鑄1107年の大観通寶である。16は初鑄1111年の政和通寶である。

出土遺物から判断すれば、造営時期は13世紀前半と考えられる。



第19図 経塚2実測図(縮尺1/30)
図中の番号は第20図に対応



第20図 経塚2出土遺物実測図・拓影(1：縮尺1/4, 2：縮尺1/2, 3～16：縮尺2/3)

3 山城

曲輪、堀切を確認した。この城に関する文献は皆無であり、城主など詳細については不明な点が多い。

1) 曲輪1 (第5・22図)

堀切1の北側斜面を削り取ることで狭小な平坦面を造成したものである。平面形は東西方向に長軸をもつ半月形を呈し、長軸3.70m、短軸2.52mを測る。標高は44.55～43.80mで、背後には堀切2を備える。堀切1に対峙する位置であり、見張台のような役割を担ったと推測される。

2) 曲輪2 (第5・6図)

調査区内で最も標高の高い地点(50.08m)に位置する。台状墓1造営の際に整形された平坦面を利用し、経塚1の集石の上に盛土をして平坦に整えている。眼下に丹後街道、西方に大日山や小浜湾、北方は北川と羽賀・熊野地区の山並み(天ヶ城跡・熊野山城跡・岡山城跡)を眺望でき、東方は多田川対岸の丘陵上にある多田山城跡や湯谷山城跡も見渡せる。平面形は楕円形を呈し、南北方向に長軸をもつ。長軸10.65m、短軸4.95mを測る。調査区内では中核となる曲輪であるが、柱穴等の遺構は検出されていない。

3) 曲輪3 (第5・6・22・23図)

曲輪2の北側斜面を削り取ることで平坦面を造成したもので、平面形は半月形を呈する。南北方向に長軸をもち、長軸2.45m、短軸2.00mを測る。標高は48.45～48.90mである。狭小な平坦面であり、曲輪2と曲輪4を結ぶ通路的な役割を果たしていた可能性が考えられる。

4) 曲輪4 (第5・22・23図)

曲輪3の北側斜面下に位置し、平面形は半月形を呈する。南北方向に長軸をもち、長軸13.60m、短軸11.60mを測る。造成面はほぼ水平で、南方に比高1.35mを測る切岸を備える。標高は46.28～46.86mで、南を除く三方の眺望に優れる。調査区内では規模の大きい曲輪だが、柱穴等の遺構は検出されていない。この平坦面は元々墓域として整備されたものである可能性があったため、最後に表面の土を全て除去して岩盤まで検出したが、墓壇の痕跡は確認できなかった。このことは、調査区内では最も手が加えられた曲輪であることに起因する可能性がある。

5) 曲輪5 (第5・22・23図)

曲輪4の北側斜面下に位置し、平面形は東西に2つの半月形を重ねたような形状を呈する。東側は南北2.64m、東西6.36mを測る。西側は東側より0.50mほど低くなっており、その規模は南北2.16mである。東西方向は転落防止柵外にのびているため、計測できない。曲輪のほぼ中央には曲輪4との通路とみられる緩斜面があり、幅0.24～1.10m、長さ1.80mを測る。標高は43.01～43.55mである。

6) 帯曲輪 (第5・23図)

曲輪4から延びて、曲輪2の東側に廻る細長い曲輪である。標高は46.56～47.32mである。曲輪2の東側斜面を削り取って造成したもので、曲輪2のほぼ中央で途切れる。幅は0.70～1.00mを測る。

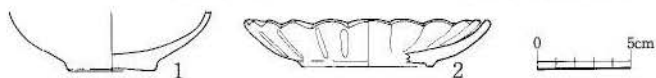
7) 堀切1 (第5・21・22図、第2表)

調査区の南端にある。曲輪1との比高10.10mを測る大規模な堀切であり、山城の北部を画している。幅6.40m、深さ0.70～1.60mを測り、西側が調査区外にのびる。標高は底面で34.25～37.00mである。

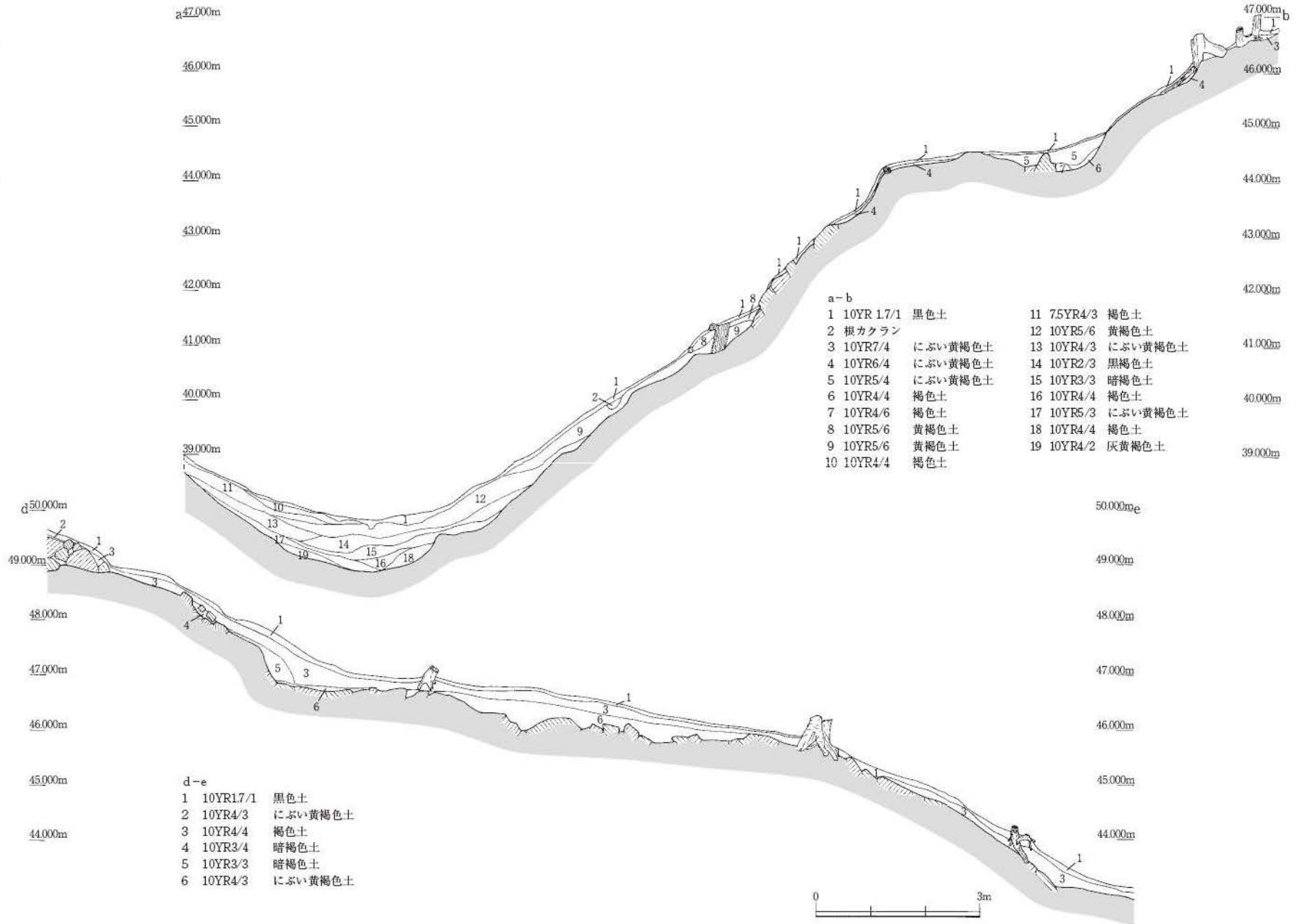
出土遺物は、弥生土器の底部と志野焼の菊型皿がある。弥生土器は底面から、志野焼は試掘時に出土したものである。底部(1)は平底を呈する。弥生時代後期後半の所産である。志野菊型皿(2)は、ヘラ状工具で口縁端部を輪花とし、丸ノミ状工具で体部内面にソギを入れる。藤澤編年の大窯第4段階後半から末に属するもので、16世紀末葉から17世紀初頭に比定される⁽⁴⁾。

8) 堀切2 (第5・22図)

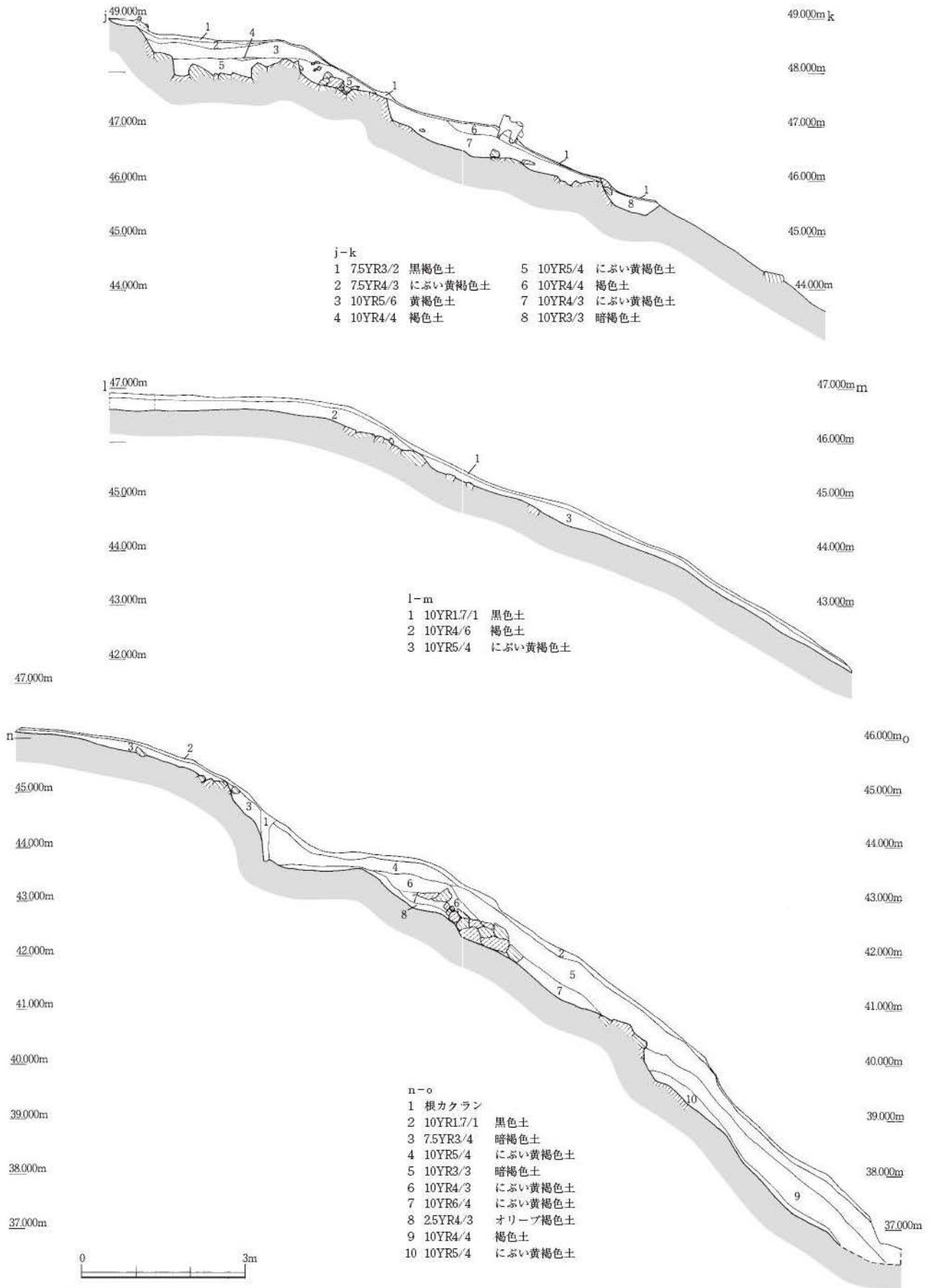
曲輪1の北側に位置する。曲輪1との比高は0.48～1.08mを測る。幅は1.79～2.47mを測り、確認した長さは7.26mである。標高は底面で44.09m～43.00mである。



第21図 堀切1出土遺物実測図(縮尺1/4)



第1節 遺構と遺物



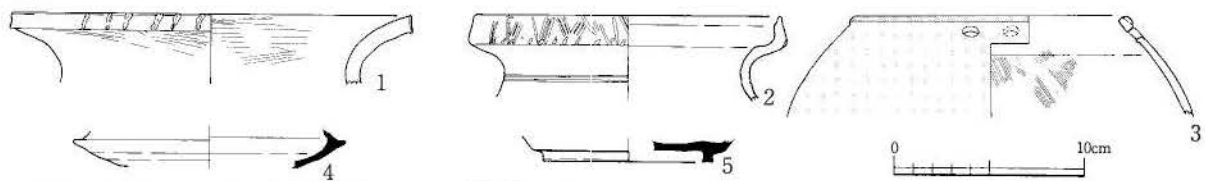
第23図 土層図2 (縮尺1/100)

4 遺構外出土遺物

弥生土器と須恵器がある(第24図・第2表)。弥生土器の壺3点はF7・E7グリッドの表土や崩落土から出土した。1は口縁部外面にヘラ状工具による刻みを施す。2は、受口状口縁の外面に山形文と刻み、頸部外面に直線文を施す。3は肥厚させた口縁端部の下に2孔1対の小孔を穿つ無頸壺である。弥生時代後期前半の所産と考えられる。須恵器は台状墓1の東側斜面で坏H(4)が、台状墓1南側の尾根筋から少し下った東側斜面で坏B(5)が出土した。4は古墳時代後期、5は9世紀に比定される。

註

- 1 日本福祉大学知多半島研究所 1994 「中世常滑焼をおって」
- 2 鶴見貞雄 1999 「火打金を考える—遺跡出土の火打金・火打石を取り上げて—」 『茨城県考古学協会誌』第11号
- 3 村上雅紀氏にご教授いただいた。
- 4 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」 『研究紀要』第10輯 瀬戸市文化財センター



第24図 遺構外出土遺物実測図(縮尺1/4) 赤彩

第2表 土器・陶磁器観察表

種別 番号	グリッド	遺構・層位	器種・器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12 口縁部 底部	調整・施文・施繪			色調		胎土	焼成	備考
								外面	内面	底部	内面	外面			
8図1	D15	台状墓1 埋葬施設1	弥生土器・壺	16.1			1.5	擬凹線(4)・ナデ	ミガキ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	微細な白・黒色粒子微量含む	良	
8図2	D15	台状墓1 埋葬施設1	弥生土器・壺		1.8		12	(摩滅)	ナデ	ナデ	10YR6/6 明黄褐色	7.5YR6/6 褐色	微細な黒色粒子微量含む	やや 軟	
8図3	D15	台状墓1 埋葬施設1	弥生土器・高坏	17.0			3.1	ミガキ・摩滅	摩滅		7.5YR7/6 褐色	7.5YR6/6 褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	良	
8図4	D15	台状墓1 埋葬施設1	弥生土器・高坏					摩滅	ナデ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	微細な黒色粒子微量含む	やや 軟	
8図5	D15	台状墓1 埋葬施設1	弥生土器・高坏	23.8			0.2	ナデ・擬凹線(6)・ミ ガキ	ナデ・ミガキ		5YR6/6 褐色	7.5YR6/6 褐色	微細な白・黒色粒子微量含む	良	
8図6	D15	台状墓1 埋葬施設2	弥生土器・高坏	27.0			1.9	ミガキ	ミガキ・工具 痕・しぼり・ナ デ・ハケ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	微細な白・赤・黒色粒子微量含む	良	小孔(1)
8図7	D15	台状墓1 埋葬施設2	弥生土器・器台	24.0			1.2	擬凹線(3)・摩滅	摩滅		5YR7/6 褐色	5YR7/6 褐色	1~4mmの赤色粒子・長石・石英・砂 岩・微細な雲母中量含む	やや 軟	
8図8	D15	台状墓1 埋葬施設2	弥生土器・脚台		7.3		0.6	ハケ・ミガキ	ハケ		5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	微細な白・赤色粒子微量含む	良	
13図1	F3	台状墓2 東南斜面	弥生土器・壺	6.5	3.9	13.5	4.9	沈着・把手貼付 のちナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ	ミガキ	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm以下の黒色粒子中量含む	良	外面黒斑あり
13図2	F2	台状墓2 第2層	弥生土器・脚部		15.4		3.4	ミガキ	ナデ		10YR6/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい褐色	微細な白色粒子微量含む	良	
13図3	E2	台状墓2 第2層	弥生土器・高坏					摩滅	摩滅		7.5YR4/2 灰褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	1mm程度の黒色粒子・長石・石英微量 含む	良	底部に小孔2
13図4	E3	台状墓2 第3層	弥生土器・器台	26.0			2	ナデ・擬凹線(6)	ミガキ		5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	1~2mm程度の長石・石英・砂岩少量 含む	良	
13図5	E3	台状墓2 第3層	弥生土器・器台	(17.4)			1	ナデ・ハケ	摩滅		7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	微細な3mm程度の長石・石英・砂岩多 量含む	良	
13図6	E2	台状墓2 埋葬施設1	弥生土器・甕	14.6			2.5	擬凹線(2)	ナデ・ケズリ		7.5YR6/6 褐色	7.5YR6/6 褐色	2mm程度の赤色粒子・長石・石英・ チャート中量含む	良	
13図7	E2	台状墓2 埋葬施設1	弥生土器・底部		3.5		6.9	ミガキ	ケズリ	ナデ	7.5YR7/6 褐色	5YR6/6 褐色	1mm以下の白・黒色粒子少量含む	良	外面黒斑あり
13図9	E2	台状墓2 埋葬施設2	弥生土器・壺	(9.8)			2.5	擬凹線(3)・ナデ	ナデ		5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	1~3mmの長石・石英・砂岩チャート少 量含む	良	
13図10	E2	台状墓2 埋葬施設2	弥生土器・底部		40.0		10	摩滅	ケズリ	摩滅	2.5YR8/4 灰黄色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1~5mmの白・赤色粒子・砂岩・チャ ート多量含む	良	
13図11	E2	台状墓2 埋葬施設2	弥生土器・高坏					ミガキ	工具痕・しぼ り・ハケ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR6/4 にぶい黄褐色	1mm程度の長石・石英・微細な雲母少 量含む	良	
13図12	E3	台状墓2 埋葬施設3	弥生土器・壺	(11.4)			6	ミガキ(摩滅)	摩滅		5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	良	
17図1	E14	経塚1	青白磁・合子壺	5.6		1.8	12	型押し成形・浮文 (花文)	ナデ		2.5GY8/1 灰白色	5Y8/3 灰黄色	微細な黒色粒子少量含む	良	口縁部付近 磨胎
17図2	D15	経塚1	青白磁・小壺蓋	2.4 (内径)		2.25	12	型押し成形・細貼 付	ナデ		5Y8/1 灰白色	—	微細な黒色粒子少量含む	良	内面磨胎
17図3	E14	経塚1	常滑焼・壺	16.1			0.7	ナデ	ナデ		5Y6/1 灰色	—	微細な3~5mm程度の長石・石英少量 含む	良	自然釉
20図1	E3	経塚2	越前焼・甕	21.45	13.15	32.6	12	12	木コテによるナデ・ ナデ	輪碾み・指頭 圧痕・ナデ	7.5YR3/4 暗褐色	7.5YR3/4 暗褐色	5mm以下の白・赤褐色・黒色粒子多量 含む	良	自然釉
21図1	D23	堀切1	弥生土器・底部		4.7		12	摩滅	ナデか	摩滅	7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	微細な黒色粒子微量含む	良	
21図2	B~ D23	堀切1	志野焼・菊型皿	12.8	6.9	2.5	2.1	2.9	クロコナデ・磨 割	クロコナデ・ソ ギ	—	—	微細な黒色粒子微量含む	良	全面長石釉
24図1	F7	表土直下	弥生土器・壺	21.0			1.4	ナデ・刻み・ハケ	ハケ		7.5YR7/6 褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1~2mm程度の長石・石英・チャート中 量含む	良	
24図2	E7	崩落土	弥生土器・壺	15.9			2	山形文・刻み・ナ デ・直線文	ナデ		2.5YR8/3 灰白色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm程度の赤色粒子・長石・石英・ チャート中量含む	良	
24図3	—	崩落土	弥生土器・壺	14.4			1.2	赤彩・摩滅	ナデ・ハケ		10YR7/4 にぶい黄褐色	2.5Y7/4 浅黄色	1mm程度の長石・石英・砂岩少量 含む	良	2孔1対で2対 (残存は1対)
24図4	F12	表土	須恵器・坏H					回転ナデ	回転ナデ		5Y5/1 灰色	5Y5/1 灰色	微細な白・黒色粒子微量含む	良	
24図5	D17	表土	須恵器・坏B		9.0		2.1	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ・高台 貼付のちナデ	2.5Y6/1 黄灰色	N6/0 灰色	微細な白色粒子微量含む	良	

第3表 台状墓1・2出土鉄製品観察表

挿図番号	グリッド	出土地	層位	種類	開	茎	法量(cm)				重量(g)			
							全長	刃身長	刃幅	刃厚				
8図9	D15	台状墓1 埋葬施設2	9層	剣	直角	直茎	全長(18.9)	剣身長(17.2)	剣幅2.7	剣厚(1.45)	茎長(1.7)	茎幅(2.4)	73.2	
13図8	E2	台状墓2 埋葬施設1	8層	鉋	—	—	全長(13.7)	刃幅(0.4)	茎幅0.7	茎厚0.4			16.2	
14図13	E3	台状墓2 埋葬施設3	床面直上	直刀	斜開	—	全長(41.2)	刀身長(37.5)	刀幅2.8	剣厚0.95	茎長(3.7)	茎幅(2.0)	茎厚0.6	277.0

第4表 経塚1出土青銅製品観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	径(cm)	幅(cm)	紐厚(cm)	身厚(cm)	重量(g)	備考
18図4	D15	経塚1 集石上面	鏡	8.1		(0.4)	0.15	30.3	瑞花双鳥鏡
18図5	D15	経塚1 石組外	方鏡	7.6	5.0		0.1	19.3	
18図6	D15	経塚1 石組内	経筒蓋	(12.1)			0.1	3.8	

第5表 経塚1出土鉄鏡観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	形式	全長(cm)	鏡部長(cm)	鏡幅(cm)	鏡厚(cm)	頸部長(cm)	頸幅(cm)	頸厚(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	茎厚(cm)	重量(g)
18図7	D15	経塚1 石組内	鉄鏡	雁股式	(11.4)	(4.6)	(4.6)	0.3	0.6	0.9	0.5	(6.2)	0.6	0.4	33.7
18図8	D15	経塚1 石組外	鉄鏡	雁股式	(7.0)	(4.3)	(4.2)	0.3	0.5	0.95	0.4	(2.2)	0.45	0.35	25.7

第6表 経塚1ほか出土鉄製品観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	刃開	背開	茎	茎尻	法量(cm)				重量(g)	備考
								全長	刃部長	刃幅	鏡厚		
18図9	D15	経塚1 石組内	刀子	直角	直角	中細		全長(20.6)	刃部長(18.6)	刃幅2.8	鏡厚0.6	124.0	
18図10	D15	経塚1 石組内	刀子	直角	直角	中細		全長(15.8)	刃部長12.9	刃幅2.4	鏡厚0.35	58.2	刃身完形、鋒は錆びぶくれのため全長16.5
18図11	D15	経塚1 石組外	刀子					全長(9.5)	刃部長(5.7)	刃幅2.6	茎部長(3.8)	29.3	
18図12	D15	経塚1 石組内	刀子			中細	粟尻	全長(10.6)	刃部長(6.7)	刃幅1.2	鏡厚0.55	19.2	目釘穴0.45、目釘残存長1.45
18図13	D15	経塚1 石組外	刀子	直角	直角	中細		全長(12.4)	刃部長(6.7)	鏡幅(2.9)	鏡厚0.4	47.4	目釘穴1(径0.35)
18図14	D15	経塚1 石組内	刀身					全長(4.3)	刃部長(4.3)	鏡幅1.6	鏡厚0.4	24.0	
18図15	D14	曲輪 平坦面北側(1層)	刀子か	斜角		中細		全長(5.4)	刃部長(1.2)	刃幅2.5	刃厚0.5	19.2	盗掘の際に、経塚1から抜き取られたものか。
18図16	D15	経塚1 石組内	不明					全長(5.0)	幅2.0	厚0.5	茎部長0.5	11.0	

第7表 経塚1出土火打金観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	形状	幅(cm)	高さ(cm)	厚(cm)	重量(g)	分類
18図17	D15	経塚1 石組外	火打金	三角	6.7	2.8	0.4	31.9	1D
18図18	D15	経塚1 石組内	火打金	山字	6.1	2.7	0.55	24.7	1D
18図19	D15	経塚1 石組内	火打金	三角	7.95	2.45	0.6	28.6	1D
18図20	D15	経塚1 石組外	火打金	山字	(9.8)	4.0	0.8	72.5	1D

第8表 経塚2出土青銅製品観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚み(cm)	重量(g)	形式
20図2	E3	経塚2	経筒身	11.8	10.8	21.35	0.05	404.0	一段蓋式
20図2	E3	経塚2	経筒蓋	11.95		2.8	0.1	70	一段蓋式

第9表 経塚2出土銭貨観察表

挿図番号	グリッド	出土地	出土地点の標高	種類	銭径(cm)	内径(cm)	銭厚(cm)	量目(g)	国名	初鑄年	背	出土時に向いていた面	備考
20図3	E3	経塚2 台石の上	33.229	咸平元寶	2.4	0.5	0.1	3.02	北宋	998	無	表	
20図4	E3	経塚2 台石の下	33.051	天禧通寶	2.6	0.7	0.1	2.47	北宋	1017	無	表	
20図5	E3	経塚2 台石の下	32.985	天禧通寶	(2.4)	0.6	0.1	1.94	北宋	1017	無	表	
20図6	E3	経塚2 台石周囲の石の下	33.078	皇宋通寶	2.4	0.8	0.1	3.19	北宋	1038	無	裏	真書
20図7	E3	経塚2 台石の周辺	33.113	至和通寶	2.45	0.75	0.1	2.49	北宋	1054	無	表	真書
20図8	E3	経塚2 台石の下	33.049	治平元寶	2.4	0.65	0.15	3.9	北宋	1064	無	表	真書
20図9	E3	経塚2 台石周囲の石の下	33.089	元豊通寶	2.5	0.65	0.1	3.71	北宋	1078	無	表	篆書
20図10	E3	経塚2 台石の周辺	33.156	元祐通寶	2.4	0.65	0.1	2.83	北宋	1086	無	表	行書
20図11	E3	経塚2 台石の下	33.076	元祐通寶	2.5	0.65	0.1	3.75	北宋	1086	無	裏	行書
20図12	E3	経塚2 台石の下	33.031	元祐通寶	2.5	0.7	0.1	3.11	北宋	1086	無	裏	行書
20図13	E3	経塚2 台石の下	32.995	元祐通寶	2.5	0.7	0.1	3.2	北宋	1086	無	表	行書
20図14	E3	経塚2 台石の下	32.997	元祐通寶	2.4	0.7	0.1	2.68	北宋	1086	無	無	篆書
20図15	E3	経塚2 台石周囲の石の下	33.082	大觀通寶	2.5	0.6	0.15	3.09	北宋	1107	無	表	
20図16	E3	経塚2 台石の下	33.029	政和通寶	2.45	0.5	0.15	3.24	北宋	1111	無	表	篆書

引用・参考文献

大森宏 1996 『戦国の若狭一人と城一』

京都府編 1923 『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊 臨川書店

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001 『京都府遺跡調査概報』第98冊

兵庫県教育委員会 1999 『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『田島元山谷遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『稲葉山城跡・黒駒遺跡』

舞鶴市教育委員会 2000 『下佐波賀遺跡・天台南谷遺跡発掘調査概要報告書』

村上雅紀 2008 『福井県の埋経遺跡』『王権と武器と信仰』同成社

村木二郎 1998 『近畿の経塚』『史林』第81巻第2号 史学研究会

第2節 まとめ

最後に、木崎山城跡で検出した遺構・遺物について概観し、まとめに代えたい。

1 台状墓

台状墓1・2の時期は弥生時代後期後半が中心であり、出土遺物から台状墓1が台状墓2に先だって造営されたと考えられる。この台状墓と同時期の集落遺跡に、台状墓北側に広がる沖積平野に所在する木崎遺跡(第4章参照)がある。台状墓と木崎遺跡との直線距離は500m足らずで、どちらからも互いがよく見えることから、木崎遺跡に居住する人々が台状墓造営に関わっていた可能性が高いと考えられる。

2 経塚

経塚1は12世紀後葉、経塚2は13世紀前半に造営されたと考えられる。同じ丘陵上であるが約60m離れており、経塚1は調査区最高所、経塚2は丘陵先端部と異なる選地を行っている。しかし、各台状墓を築造した際に一度掘削されていて、掘削が比較的容易な場所を選んでいるところは共通している。

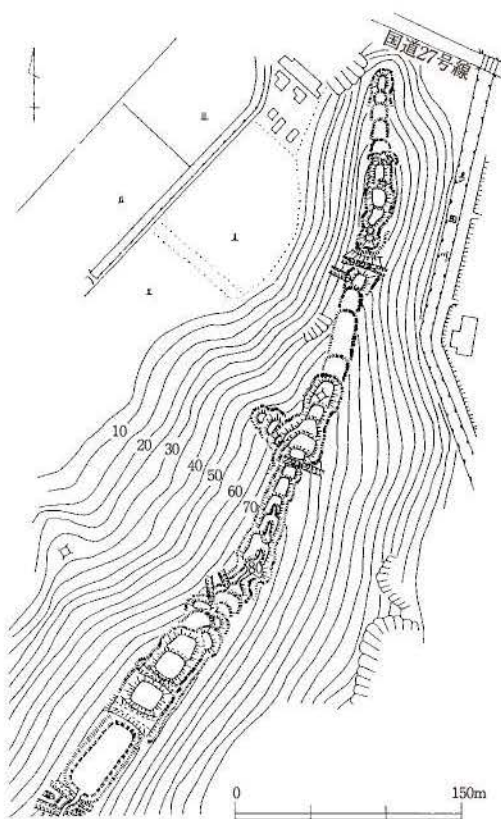
経塚1は埋経行為の最盛期に作られたものであり、方形石組に豊富な副納品を納めている。石組の上には集石があり、南東隅の石の上には寺社に奉納されていたと考えられる掛鏡が置かれていた。

経塚2は、経筒に外容器を被せる形態であり、村上雅紀氏によれば京都府宮津市エノク経塚、同与謝野町塚ヶ谷経塚、同舞鶴市天台南谷遺跡、兵庫県朝来市一乗寺経塚などに類例がみられる。経塚2では、このような北近畿を中心に確認される形態を採用しながらも、外容器には越前焼を使っており、当地の地域性をうかがわせる。また、地鎮のために銭貨を多く入れながらも、それ以外の副納品が全くみられないことは、13世紀前半に埋経行為の衰退とともに副納品の埋納がなくなっていく状況と符合している。

経塚の立地する丘陵の東側、谷を挟んで対峙する位置には、8世紀後半の創祀と伝わる遠敷郡筆頭の式内社である多田神社と、その神宮寺として成立した多田寺がある。経塚が立地する丘陵は、多田寺からは目視が困難であるが、多田神社からは十分に視認できる。多田神社と多田寺は霊峰多田ヶ岳と密接に関連しながら成立したとされており、多田ヶ岳から派生する丘陵上という当経塚の立地を重視すれば、これらの寺社が経塚造営における勸進としての役割を担った可能性が考えられる。

3 山城

沖積平野に突き出た丘陵上にあつて眺望に優れ、その脇を丹後街道が通るといふ好立地にある。調査指導を依頼した中井均氏からは「堀切を中心とした城で、切岸があまり用いられていない。何らかの緊張関係が生じたために城域を拡大したもので、臨時的に使用したものと考えられる。」との指摘を受けた。大森宏氏作成の要図(第25図)により堀切1の南側が本来の城の範囲とみられることや、台状墓造営の際につくられた平坦面を利用するなど曲輪の造成が比較的小規模な工事にとどまると推定されることも、この指摘を裏付けるものと考えられる。



第25図 木崎山城要図(縮尺1/5,000)

第4章 木崎遺跡の調査

橋脚部分5箇所について発掘調査を行い、市道木崎東西線に隣接する水路部分(4区北側)とJR小浜線沿いの橋脚部分1箇所(6区)については立会調査を行った(第27図)。

調査区は、1～5層の水田耕作土および圃場整備時の盛土に覆われていた(第26図)。その下層の6～8層が包含層であり、主として6層は平安時代、7・8層は古墳時代後期と弥生時代後期の遺物が出土している。遺構確認面は9層上面であるが、4区では8層上面でも遺構を検出した。遺構確認面である7層および8層は湧水のある砂層であり、調査中は常に水に悩まされた。また、各調査区の遺構確認面は西側に向かって緩やかに低くなっているため、西側には常時水が溜まっていた。

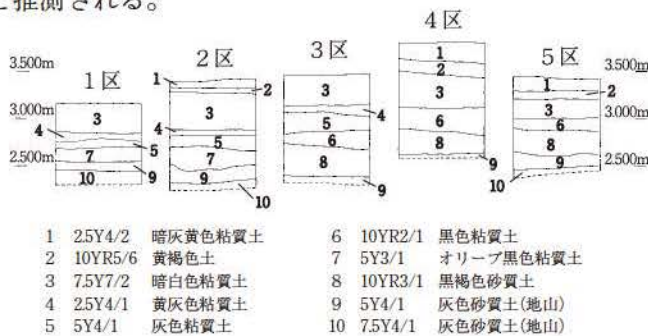
遺構・遺物の時期は調査区によって異なり、中心となる時期は、1・2区が弥生時代後期後半、3・4区が弥生時代後期後半・古墳時代後期・平安時代の3時期、5・6区が古墳時代後期である。

遺物の出土量はテンバコで、1区が9箱、2区が13箱、3区が35箱、4区が55箱、5区が34箱、6区が7箱を数える。6区が立会調査である点を考慮しても、3～5区の出土量が特に多く、中でも4区の出土量は突出している。

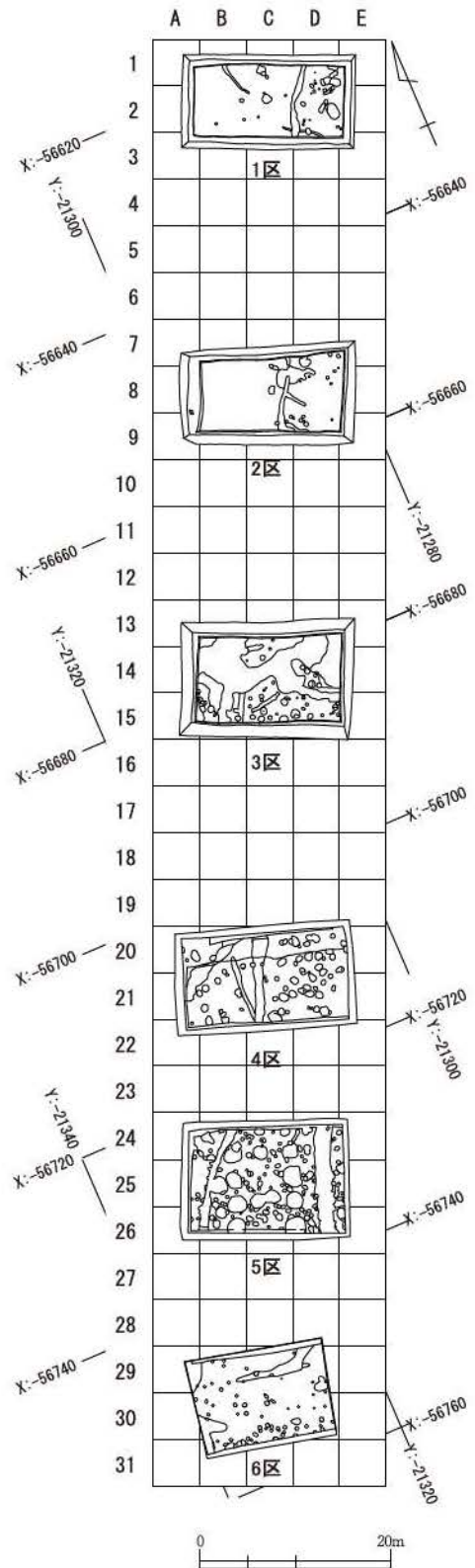
以下、調査区ごとに、その概要を記述する。なお、主要な遺構・遺物についてのみ取り上げ、そのほかは一覧表・観察表をもって記述に代えたい。

第1節 1区

遺構は、土坑4基、柱穴32基、溝3条を検出しており、調査区西側は東側に比べて遺構密度が低い。出土遺物などから弥生時代後期後半を中心とする集落の縁辺部に当たると推測される。



第26図 土層概略図



第27図 全体図(縮尺1/800)

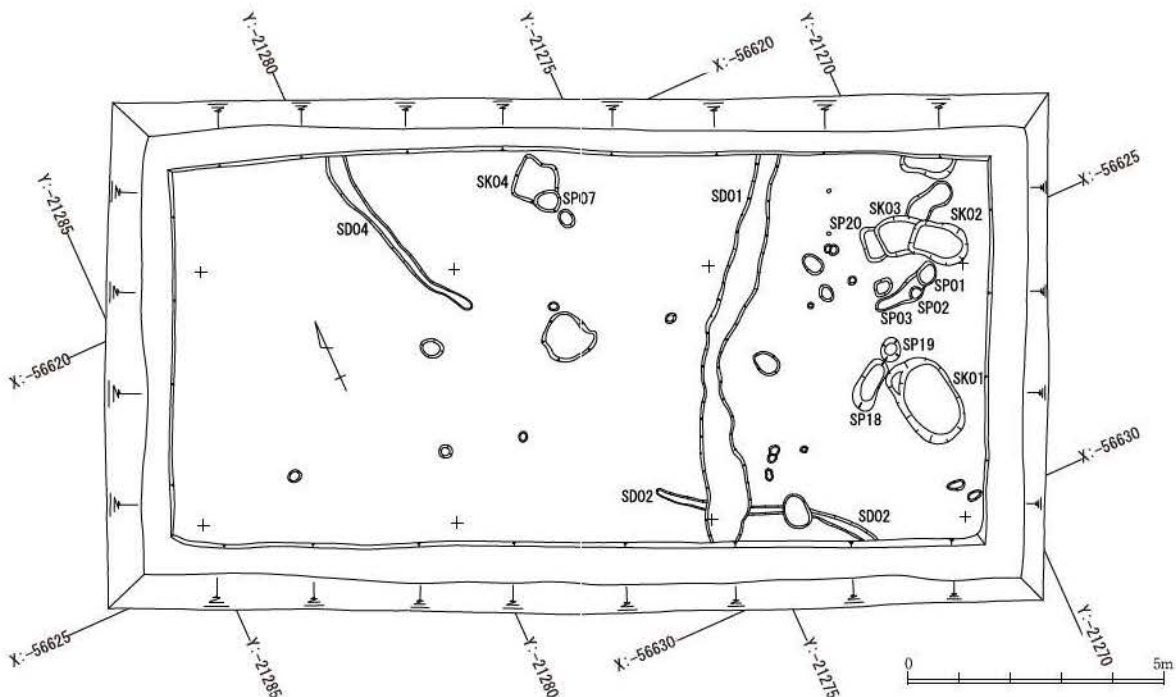
1 遺構出土遺物

遺構から出土した遺物は、弥生時代後期後半から末にかけての時期の土器に限定される。このうち、甕3点、鉢1点、脚部1点を図示する(第29図、第17表)。甕は全て有段口縁を呈するが、口縁部はあまり伸張しない。口縁部が外傾するもの(1)と、ほぼ直立するもの(2・5)がある。1・5は口縁部外面に擬凹線を施し、2・5は胴部が倒卵形を呈する。鉢(3)は平底から内湾気味にひらく器形で、片口を有する。脚部(4)はハの字状にひらく器形で、口縁端部は狭小な面をもつ。小孔3孔を穿つ。

2 遺構外出土遺物

遺構出土遺物と同様に弥生時代後期後半から末にかけての土器が主体であるが、古墳時代後期の須恵器や土師器、平安時代の土師器・須恵器がわずかに混じり、銭貨1点も出土している。このうち弥生土器12点、須恵器1点、銭貨1点を図示した(第30図、第17・22表)。

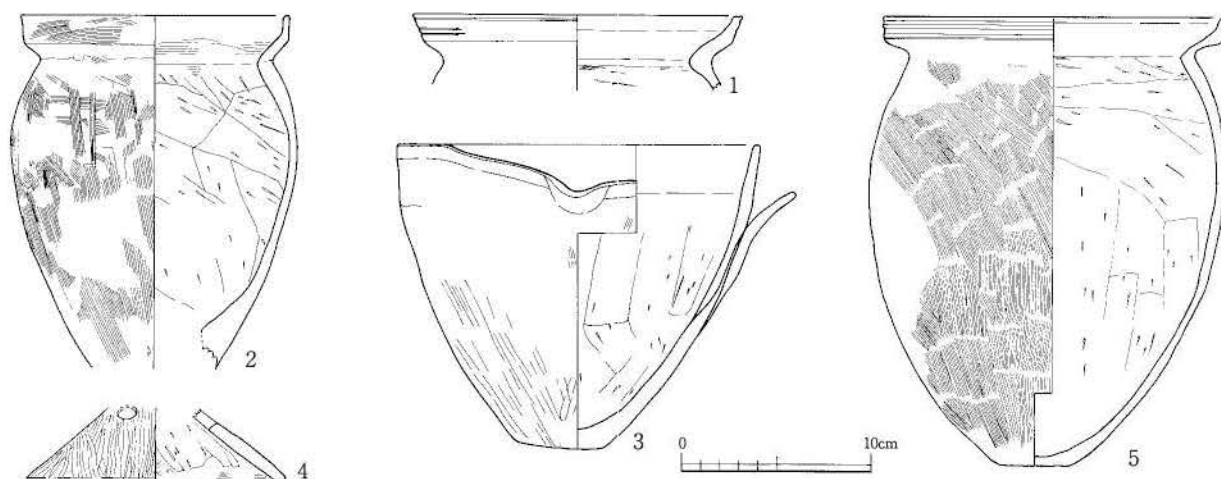
弥生土器には甕・壺・器台・装飾器台・鉢・蓋があり、弥生時代後期後半から末にかけての時期のものが主体である。壺には、無頸壺(2)、有段口縁の小型壺(3)、有段口縁の広口壺(4)、口縁部が有段状となる長頸壺(5)、口縁端部に狭小な面をもつ長頸壺(6)がある。装飾器台(9)は、丹後に系譜をもつ器形で、有段を呈する口縁部は短い。涙滴形と推測される透かしが2段施されるが、その大きさは比較的小さい。受部外面にはヘラ描きによる文様がみられる。装飾器台(10)は、北陸に系譜をもつ器形を呈すると考えられる。蓋(12)は口縁端部付近に2孔1対の紐を通す孔がみられる。須恵器の皿(13)は灰釉陶器写しで、10世紀前半の所産と考えられる。銭貨(14)は北宋銭の政和通寶である。



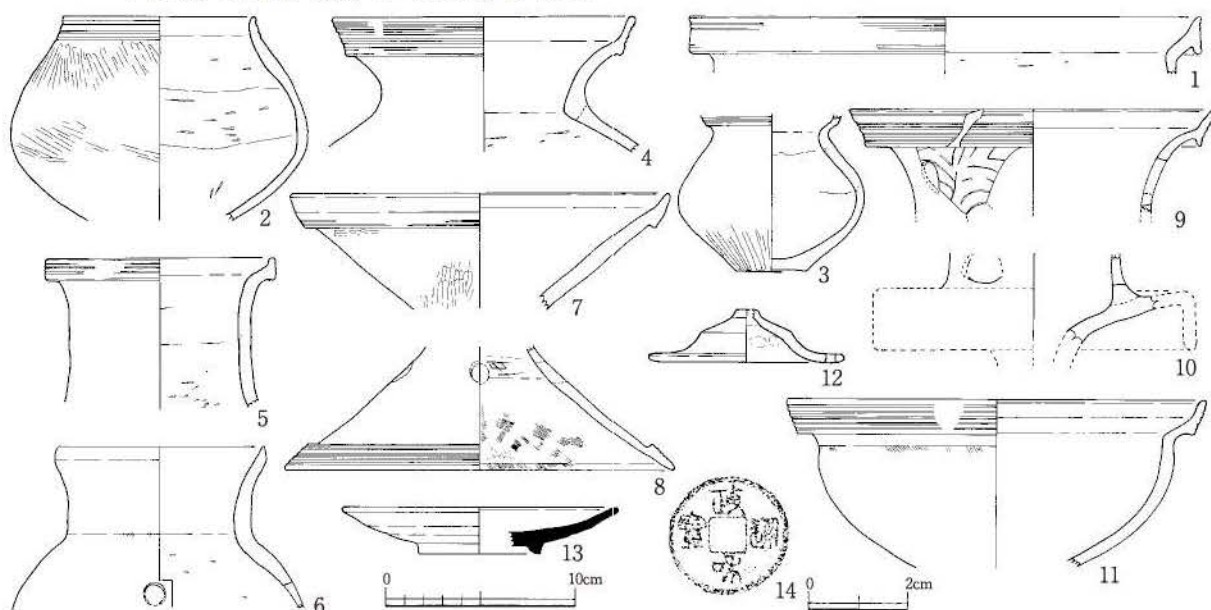
第28図 1区遺構配置図(縮尺1/150)

第10表 1区主要遺構一覧表

遺構名	グリッド	種別	形状	規模(m)	出土遺物	備考	挿図No.
SK01	D2	土坑	平面形:楕円形 断面形:角が緩やかな逆台形	長軸1.79 短軸1.12 深さ0.38	弥生土器		第28図
SK02	D1	土坑	平面形:隅丸方形 断面形:U字状	長軸1.15 短軸0.82 深さ0.32	弥生土器	SK03を切る	第28・29図
SP02	D2	柱穴	平面形:楕円形 断面形:浅皿状	長軸0.51 短軸0.45 深さ0.10	弥生土器		第28・29図
SP19	D2	柱穴	平面形:楕円形 断面形:U字状	長軸0.48 短軸0.39 深さ0.11	弥生土器		第28・29図
SD01	D1~D3	溝	断面形:浅皿状	幅:0.33~0.87 深さ0.06~0.09	弥生土器	流水方向:南西→北東、SD02を切る	第28・29図
SD02	C2~D3	溝	断面形:浅皿状	幅:0.14~0.24 深さ0.05~0.07	弥生土器	流水方向:南東→北西、SD04と同一の溝	第28図
SD04	B1~C2	溝	断面形:浅皿状	幅:0.13~0.43 深さ0.08~0.16	弥生土器	流水方向:南→北、SD02と同一の溝か	第28図



第29図 1区遺構出土遺物実測図(縮尺1/4)
1:SK02, 2:SP02・SP03, 3・4:SP19, 5:SD01



第30図 1区遺構外出土遺物実測図・拓影(1~13:縮尺1/4、14:縮尺2/3)

第2節 2区

遺構は井戸1基、土坑2基、柱穴20基、溝2条を検出した。東半分集中しており、西半分では井戸1基を確認したのみである。1区と同様に、弥生時代後期の集落の縁辺部に当たると推測される。

1 井戸

SE01(第31~34図、第17・21表) 西壁際に位置する。付近は湧水が激しく、西側以外は掘形を確認できなかった。土層断面図から復元すれば、掘形は直径0.60m前後、深さ0.30m前後と推測される。

縦板4枚を四角く組む縦板組構造で、確認時には土圧のため平行四辺形を呈していたが、本来は長軸0.36m、短軸0.30mの長方形を呈していたと考えられる。長軸は南北方向である。縦板は長さ0.53~0.63m、幅0.29~0.36m、厚さ0.02~0.03mを測り、4隅がびたりと組み合うように側面は内側に向かって傾斜面が付けられている。縦板下方の両端には穿孔があり、ここに樹皮を通して4隅を緊縛し、穿孔と樹皮との隙間には木片を差し込んで強く固定している。加えて北東と北西隅では、緊縛を強固にするため、樹皮で縛る際に細長い板材を内側に挟み込んでいる。北東の角を除いて井戸枠の傍らには、井戸枠とはほぼ同じ高さの杭が打ち込まれており、杭は幅0.04~0.08m、厚さ0.02m前後を測る。

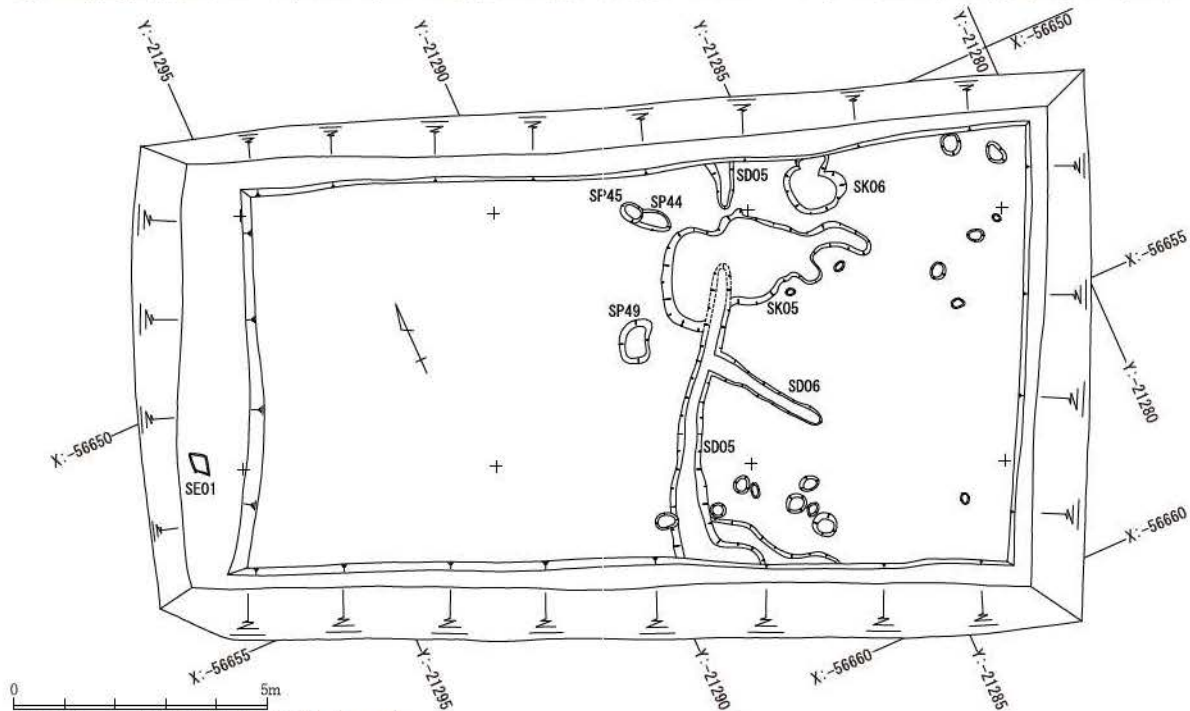
井戸枠内からは弥生時代後期後半の土器を中心に、多くの遺物が出土している。特に注目されるのは中位で出土した木製縦杓子(5)で、その身部には小型壺(2)が載った状態で出土している。どちらも完形である。縦杓子はSE01に程よい大きさで、通常水を汲むのに使われていた可能性が考えられる。この縦杓子よりも上位で出土したのが小型甕(1)、脚部(4)、壺(3)の口縁部であり、脚部(4)と壺(3)の口縁部は部位としてはほぼ完形である。また、壺(3)の胴部は縦杓子よりも下位で出土しているが、1/4程度しか残存していない。SE01は廃絶の際に、一旦中位まで埋めてから、縦杓子と小型壺などを置いて埋め戻していると考えられ、井戸鎮めなど埋井に関する儀礼が行われたことをうかがわせる。また、底部付近ではドングリとオオモナモミの種子各2個体(図版第24)が出土している。

小型甕(1)はくの字状口縁を呈し、内外面ともハケ調整で仕上げる。小型壺(2)はくの字状口縁をもち、底部は平底を呈する。壺(3)は長胴を呈する。口縁部は有段状であるが、口縁部下端の屈曲は緩やかである。脚部(4)はハの字状にひろく器形で、口縁端部は狭小な面をもつ。小孔3孔を穿つ。縦杓子(5)は一木作りである。身部は丸底で、深さが約6.5cm、容量は約1ℓを測る。柄は三角形を呈し、身幅と同じ程の18cmである。年輪年代94BCを上限年代とする鑑定結果を得ている⁽¹⁾。井戸枠の縦板(6~9)は、下部が上部よりも若干厚く整形されおり、加工は下半部で明瞭で幅は約3.5cmを測る。緊縛のための孔は方形で、1cm前後である。表面には部分的に焦がしの痕がある。

出土遺物や縦板組み井戸の類例などから判断すれば、弥生時代後期後半に属する遺構と考えられる。

2 遺構出土遺物

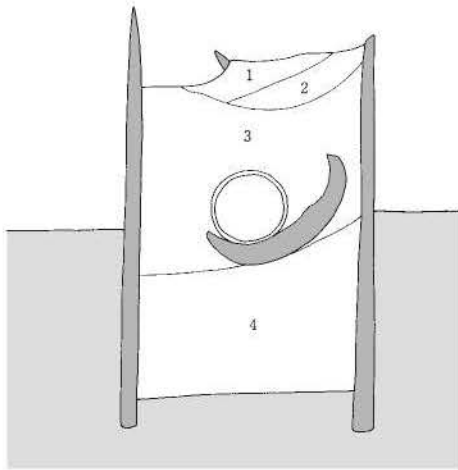
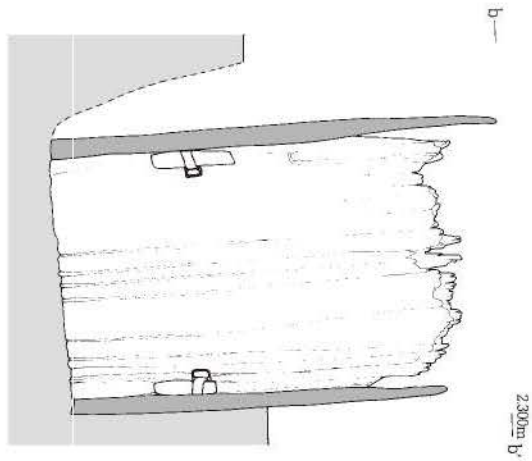
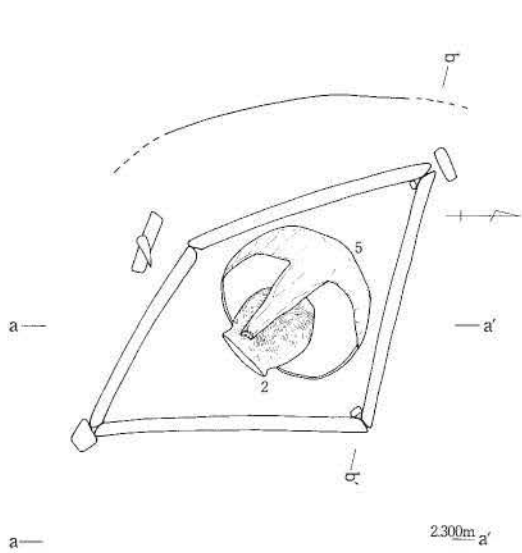
弥生時代後期後半から末にかけての時期の土器に限定される。このうち、壺3点、胴部1点、鉢2点、



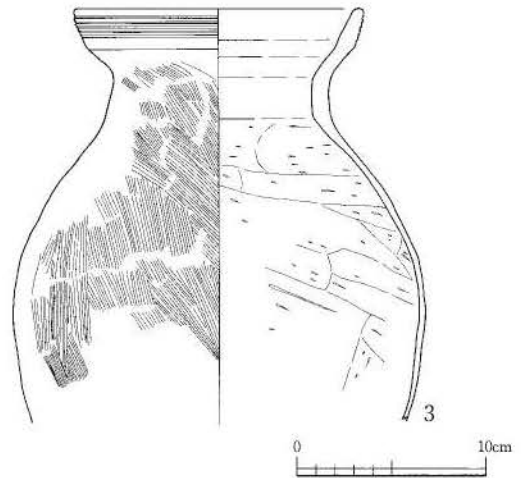
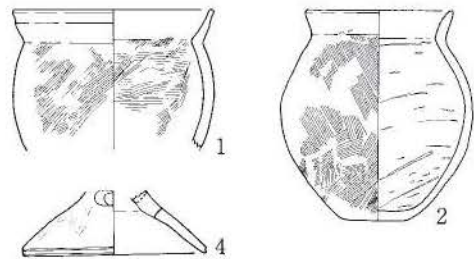
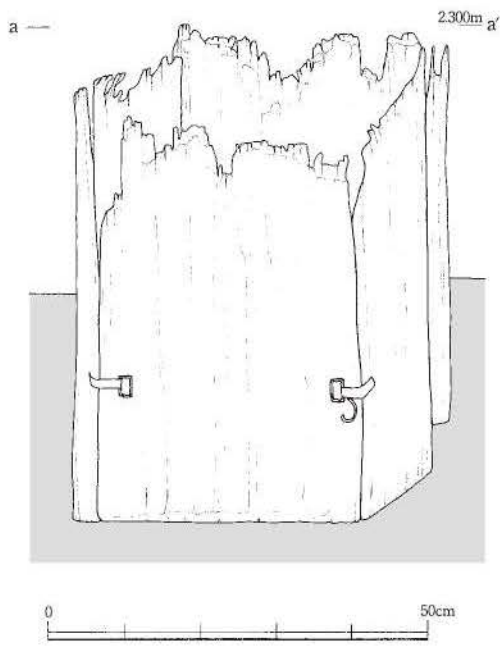
第31図 2区遺構配置図(縮尺1/150)

第11表 2区主要遺構一覧表

遺構名	グリッド	種別	形状	規模(m)	出土遺物	備考	挿図No.
SK05	C8・D8	土坑	平面形:不整形 断面形:角が緩やかな逆台形	長軸3.13 短軸1.92 深さ 0.10~0.32	弥生土器	SD05に切られる	第31・35図
SP45	C8	柱穴	平面形:楕円形 断面形:浅皿状	長軸1.15 短軸0.82 深さ0.32	弥生土器	SP44を切る	第31・35図
SP49	C8	柱穴	平面形:楕円形 断面形:角が緩やかな逆台形	長軸0.51 短軸0.45 深さ0.10	弥生土器	SK05出土土器と接合	第31・35図
SD05	C7~C9	溝	断面形:U字状	幅:0.37~0.88 深さ0.13~0.22	弥生土器	流水方向:南西→北東、SK05とSD06を切る	第31・35図
SD06	C8~D8	溝	断面形:U字状	幅:0.30~0.51 深さ0.09~0.18	無	流水方向:南→北、SD05に切られる	第31図



- SE01
 1 25Y3/1 黒褐色粘質土
 2 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
 3 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
 4 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土



第32図 2区SE01実測図(縮尺1/10)
 図中の番号は第33・34図に対応

第33図 2区SE01出土遺物実測図1(縮尺1/4)